

May-2009
No.35
NEWSLETTER
Kyoto International Cultural Association, Inc.

(財)京都国際文化協会

京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館116号室
TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006 〒606-8305
e-mail office@kicainc.jp
URL http://kicainc.jp/

会長 西島安則 ・ 理事長 千玄室

2008京都国際文化協会
エッセーコンテスト
《私の見た日本》



Mr. McMurray at Forum in English

第31回エッセーコンテスト（国際交流基金京都支部・京都大学国際交流センター・京都ライオンズクラブ・京都府後援）には、日本語22編、英語59編の応募がありました。日本語の部、英語の部に分けて選考会を開き、9月28日（日）には優秀作6編の著者を招いて京都大学百周年時計台記念館で発表会を行いました。発表とフォーラムの後、6名には、西島安則会長から「京都国際文化協会賞」と副賞5万円が、国際交流基金京都支部斎木宣隆支部長、京都ライオンズクラブ文化部長若柳壽延四世家元、スリーエーネットワーク社からそれぞれ記念品が贈呈されました。入賞作品は次の通りです。

日本語の部「京都国際文化協会賞」3名

「違うからこそ面白い、面白いからこそ理解が深まる」
アイニンソフィアワティ（インドネシア）

「私の第二の故郷、日本の今」

真砂 クリスチーナ さゆり（ブラジル）

「マスメディア」 劉 慧子（中国）

英語の部「京都国際文化協会賞」3名

「私の町内会」

深瀬 ヘザー（オーストラリア）

「日本文化、my cup of tea」

マクマレイ デビッド（カナダ）

「サマーキャンプの少年たち」

ラモス P. J. パトリック（フィリピン）

KICA Essay Contest: Japanese Culture, My View

The Presentation and Forum of the 31st KICA Essay Contest was held at the Clock Tower Centennial Hall, Kyoto University on Sunday, September 28th. Three authors of the selected essays in Japanese and three in English presented their essays and then were honored and awarded the KICA Prizes and the supplementary prize of ¥50,000. In addition, 3A Corporation presented "Nihongo Dictionary for Practical Use", the Japan Foundation Kyoto Office presented furoshikis, and Kyoto Lions Club presented CDs to the prize-winners as commemorative gifts.

Prize-winning Essays in Japanese

"How Different, How Interesting"

Ainin Shofiawati (Indonesia)

"My Second Home Country"

Cristina Sayuri Masago (Brazil)

"Mass Media"

Liu Huizi (China)

Prize-winning Essays in English

"Living The Local Culture - The Importance of the *Chonakai*"

Heather Fukase (Australia)

"Japanese Culture, My Cup of Tea"

David McMurray (Canada)

"All I Really Need to Know About Japanese Culture I Learned in Summer Camp"

Patrick John Reyes Ramos (the Philippines)



Prof. Nishijima Giving an Opening Address

入賞作6編の要約は3頁のプログラムに、全文は12頁以降に掲載しています。

発表会は西島安則会長の開会の挨拶で始まりました。「国際交流基金日本語センター監修『日本語の開国』によると世界には六千以上の言語があり、インド一国だけで三百を数えるとか。言語は文化のバックボーンとなるものですから、文化の多様性が一番よく表われます。私は1953年に米国に留学しましたが、到着直後にドナルド・キーン氏と会い、オーティス・ケーリ氏とは帰国後に親交が始まりました。このお二人は米海軍に所属し、ハワイへ毎週ドラム缶一杯に送られてくる玉砕あるいは負傷した日本人兵の日記を読む任務にあたっており、無作為に作業を進めても日本軍の苦しい戦況や兵士の心情が理解できたそうです。戦後、日本語・日本文化研究でお世話になったキーンさんは本を随分出され、ケーリさんは京都がなぜ戦火を免れたかを研究されました。お二人とも当協会にはご縁があり、この本を読みながらいろいろ思い出しました。本日は、6名の発表を聞かせてもらいながら、文化交流ということをみんなで考えましょう。」

続いて、京都ライオンズクラブの若柳壽延氏から、当コンテストの後援に至った経緯と発表者への励ましの言葉をいただきました。

会場には、日本語の部に80名、英語の部に110名の参加がありました。発表者に付き添う先生や友人。審査員の斎木宣隆、クレイグ・スミス、青谷正妥先生のお声かけで集まってくださった皆様でした。

最初の発表はアイニンソフィアワティさん。離日を目前に、先生や友人に感謝の気持ちを込めて書いたエッセーを発表しました。フォーラムでは加藤久雄奈良教育大学教授の進行で、和やかな雰囲気質疑応答が行われました。同じムスリムの男子留学生から、「イスラム教徒に対して、日本人は正しい理解を示してくれましたか」と問われると、「留学中もイスラム法を堅く守ってきましたが、周りの人たちは理解してくれました。国家も民族も一括りにしないでください。人はそれぞれです。互いの信条を尊重し合えると思います」と答えました。

二番目はブラジル日系3世の真砂さん。フォーラムでは、幼児を連れて海外生活を経験した女性から、祖父母世代から伝えられた日本の伝統行事はと問われ、「餅つきやおせち料理、七夕や盆踊りです。材料が揃わなくても、工夫しました」と少女期を楽しげに振り返りました。ブラジルに残る大切にしたい日本文化はと問われて「お年寄りを大事にする心です」ときっぱり答えました。

最後は大学で自動車工学を学ぶ劉さん。卒業後は日本企業に就職が決まっています。会場からは「来日してマスメディアで初めて知った情報はありますか」「日本人と違うと思う価値観は何ですか」「地方の放送は標準語ですか」と質問が続き、劉さんは「中央テレビは北京語、広東語、英語で放送されますが、地方では方言も尊重しています。日本でも地方で方言が話され



Ms. Liu Presenting Her Essay

第31回

KICAエッセーコンテスト《私の見た日本》発表会

日本に住み、学び、働く外国籍の人の視点から見た日本の社会、経済、文化、日常生活について、81編の中から選ばれた優秀作6編の著者が発表します。エッセーを通して互いに新しい発見をし、相互の理解を深めることを願ってフォーラムを行います。選考委員、発表者、そして会場の皆様に加わっていただき、意見交換と交流の時間が持てれば幸いです。ご参加をお待ちしています。

日時 2008年9月28日(日)
日本語の部13:00~14:30、英語の部15:30~17:00

会場 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールIII

参加費 無料・申込不要

日本語の部 発表とフォーラム

13:00 開会のあいさつ

13:15 違うからこそ面白い、面白いからこそ理解が深まる
アイニン ソフィアワティ

いつもスカーフで髪を隠し、剣道の稽古中にも裸足を見せず、1日5回のお祈りを欠かさず、食べ物タブーを守ってきたインドネシアからのムスリム女性留学生。きちんと説明すれば、違うことはまた楽しいことだと、例外なく理解を示してくれた日本人。

13:35 私の第二の故郷、日本の今
真砂・クリスチーナ・さゆり

ブラジル日系3世の女子留学生の目に映った日本の今。それは祖母から聞かされていた憧れの日本とはずいぶん違っていた。しかしその中にも、人と自然との共生や季節の移りかわりと共にある豊かな食文化がはぐくまれていることを知り、ふたつの国を新しい目で見はじめた。

13:55 マスメディア
劉 慧子

留学生として日本の地方都市で暮らしはじめ、日本の国への先入観が次々に壊されてゆく一方、日本人の中国観にもなにか違和感を覚えるようになった。これは両国のマスメディアの報道姿勢に問題があるからではないだろうかと考え、自分なりの提言をする。

14:15 フォーラム、表彰式
14:45 休憩:お茶を囲んで



英語の部 発表とフォーラム (発表は英語ですが、フォーラムは英語と日本語で進行します。)

15:35 Living The Local Culture
- The Importance of The Chonaikai
Heather Fukase

日本人男性の妻として、気骨の折れる町内会に参加し、コミュニティと融和するか、またはよそ者の近代人としてそれを避けるか、そのはざまで揺れる。年を追って地域文化が衰退してゆくのを座視できるだろうか。私は地域の文化を知り、分かり、行動し、そして次世代に伝えてゆく道を選びとった。

15:55 Japanese Culture, My Cup of Tea
David McMurray

作者はここ14年間 Asahi Haikuist Network の英語俳句の選者。毎日100以上の投稿句に接する。折々に出会った句を紹介しつつ、日常の茶をたしなむ世界を探り、季節感の表出を吟味し、また世界でもっとも短い詩型のさらに短いかたちの可能性を探ってみる。

16:15 All I Really Need to Know about Japanese Culture I Learned in Summer Camp
Patrick John Reyes Ramos

フィリピンから留学生として来日してまもなく、中学1年生の英語サマーキャンプのファシリテータとして参加。少年たちの行動の中にすばらしい規律、チーム行動、バランス感覚、積極性、国際性を見出し、それらを分析して日本の持つ力の源泉を理解しようとする。

16:35 フォーラム、表彰式
17:30 懇親会 カフェレストランCamphora



主催: 京都国際文化協会

〒606-8305

京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館116号室

Tel. 075-751-8958 Fax. 075-751-9006

E-mail office@kicainc.jp URL http://kicainc.jp/

後援: 国際交流基金京都支部・京都大学国際交流センター

京都ライオンズクラブ・京都府

協賛: (株)スリーエーネットワーク・(株)にほんごの凡人社



Prof. Nishijima Awarding Three Authors with KICA Prizes

ていますが、放送は共通語であるのと同じです。中国でも統一を強制するのではなく、交流のために学校で全国共通語を勉強していると思います」と現実を踏まえて快活に答えました。

西島先生は片倉もと子先生の著書『ゆとろぎ—イスラムのゆたかな時間』を紹介して、今を大切にゆったりと暮らす人々に学び、以前の日本の暮らしを再評価してはどうかと提案されました。玉村文郎先生は時間、空間、方言について3人に見解を尋ねられ、海田能宏先生は、アイニンさんが略式ではなく正式に礼拝や断食を行ったことは、日本人に驚きを与え、知らない世界への目覚めとなっただろうと指摘されました。

表彰式では、西島会長から賞状、副賞、記念品が3名それぞれに贈られ、国際交流基金京都支部支部長、齋木宣隆氏より「入賞おめでとうございます。皆様、表現や描写に優れ、ドキュメンタリーを見ているような迫力を感じました。また日本人同士では決して出ないテーマで、新鮮で面白い内容でした。私たち日本人にとって足元を見直すよい機会をいただいたと感謝します」との祝辞と記念品が贈られました。

2009京都国際文化協会エッセーコンテスト《私の見た日本》

京都国際文化協会では日本にお住まいの日本語を母語としない方々から「私の見た日本」をテーマにエッセーを募集しています。日本語の場合は4000~6000字、英語の場合は2000~3000語とします。申込用紙をハガキまたはEメールでご請求ください。締切は2009年8月3日(消印有効)です。応募エッセーは日本語と英語に分けて選考し、総数6編の優秀なエッセーの筆者には発表会(9月26日、京都)に参加することを条件に「京都国際文化協会賞」(副賞5万円)を贈ります。

詳細は協会ホームページをご覧ください。http://kicainc.jp/

The hall was packed with an audience of over 100 people as Prof. Masayasu Aotani volunteered to coordinate the Presentation and Forum.

The following are summaries of the prize-winning essays in English provided by the authors themselves for the audience on September 28 and the complete versions appear from page 12 on.

"Living The Local Culture - The Importance of the Chonaikai"

Heather Fukase

Samurai, Ikebana, Taiko, Zen, JPop, Anime. Just as important as these notable aspects of Japanese culture are the practices of people in their communities during the course of their daily lives. These aspects of culture are not immediately apparent to the tourist- it is only by becoming part of the community that you can understand them. The fastest way to become part of a community is through involvement with the *chonaikai*. Via various events, the *chonaikai* facilitates interaction between members of the community. The *chonaikai* is being threatened by many aspects of modern life. We need to fight to preserve it or lose an important definer of what Japan is.



Ms. Fukase Presenting Her Essay

"Japanese Culture, My Cup of Tea"

David McMurray

By the time I empty a teapot each morning, I'll have received dozens of haiku. For the composers, words are

not the most important focus. Neither is what they intend for us to read between the lines. Season words are not the most essential part of a haiku. Whether a haiku is structured in a 5-7-5 syllable form or a pithier 3-5-3, it is not so integral to the haikuist. Writing about the weather or a frog does not make a haiku. Metaphor is not the end of the world. Nor is ellipsis... For the haikuist, timing is everything.

"All I Really Need to Know About Japanese Culture I Learned in Summer Camp"

Patrick John Reyes Ramos

Culture is a society's way of life which includes art, clothing, food and rituals. Thus, samurai, sumo, sake, sushi, kimono and ikebana easily represent Japan's culture. While the above are popular icons of the country, I realized from my recent English Summer Camp experience that the Japanese people constitute the real wealth of its culture. Indeed, I discovered through the young students of the Kirigaoka Junior High School that the Japanese people's exemplary discipline, passion for knowledge, spirit of camaraderie and sense of unity, appreciation and concern for nature and unwavering respect for other people, regardless of race, language and religion, make the Japanese culture truly unique, vibrant and remarkable.

Professor Craig Smith, the member of the selection committee, gave closing words to the authors of the best six essays and the audience.

"Carbon footprints. Last night, as I was drinking a kind of Sapporo beer, I discovered that had an unexpected impact. I knew that drinking beer always had an impact on me personally, but last night the Sapporo Beer Company informed me that drinking that kind of beer had put 161 grams of carbon dioxide into the atmosphere. So I learned that even drinking beer has a negative impact on our world. I must do something to offset the beer I drank. A new challenge coming to me late in life. Cultural footprint. June 12th, 2008, the government of

my homeland, Canada apologized to Canadian Aborigine people for damage that the government policies had done to them. There was a practice of prohibiting native peoples to learn about their own cultures; to speak their own languages. Some cultural footprints need to be offset. It's very pleasing that KICA Essay Contest and your participation today, speakers and specially the audience, offset some of that negative kind of footprint and we can say that this kind of event leaves positive footprints as we make a cultural journey through life. Thank you very much to the people who have organized today's event and everyone who took part. Thank you."

2009 KICA Essay Contest: Japanese Culture, My View

KICA is holding an annual Essay Contest for international residents of Japan. Japanese essays must be between 4,000 and 6,000 characters in length and between 2,000 and 3,000 words in English. An application form can be requested via postcard or e-mail. The application deadline is August 3, 2009. The selection of essays will be divided into Japanese and English. The six best essays will be awarded KICA prizes, and each author is expected to give a fifteen-minute presentation on September 26, 2009 in Kyoto. Please visit our site for the details: <http://kicainc.jp/>



Prof. Smith Awarding Three Authors with KICA Prizes

国際文化講座<<KICAセミナー>>

日本語教育や異文化間理解について各分野の専門家をお招きして開くKICAセミナーは、2008年度、7回のセミナーを開きました。

いずれも参加型セミナーで、具体的、実践的で好評を得ています。九州、名古屋など遠方からの参加者もあり、アンケートに応じてのさまざまな提案や意見からもこのセミナーへの期待が感じられます。

第1回 2008年7月5日(土) 14:00—16:00

テーマ「日本語のコミュニケーション能力を高める

ためには何を教えればよいか」

講師 野田尚史先生(大阪府立大学教授)

野田先生はコミュニケーション能力を高めるためには、教え方だけではなく教える内容も変えなければならないと主張され、内外で注目を集めておられます。

□セミナー参加者から寄せられた感想です。

初級学習者から「練習で文は作れるようになるけれども、どんな時に使うのかわからない」と言われ悩んでいましたので答えが見つかるのではないかと思います。セミナーでは「コミュニケーション能力育成」の観点から教科書の構成や文法項目などの見直しをしました。それを通して、文法項目が何を基準として並べられているのか、また、それらの項目が実際の会話で必要なものかどうか、例文などが会話として適切な表現かどうかを考えることなく、「教科書に載っている全てをそのまま教える」レッスンをしていたことに気付かされました。受講後は、学習者が会話する上で必要な文法項目かどうか、表現が適切かどうかなどを考え、レッスンをするように心がけています。(大上協子)

第2回から第5回は『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』の教え方講座で、2日間の連続セミナーになりました。暑いさなかの長時間講義にもかかわらず、各回40人を越える参加者が熱心に受講しました。4人の講師は、すべてテキストの執筆協力者。講義はどこまでも細やかで具体的。明日からの授業に活かせると好評でした。



田中よね先生

第2回 2008年8月30日(土) 10:00—13:00

講師 田中よね先生

(神戸大学留学生センター非常勤講師)

『みんなの日本語Ⅰ』1課から13課まで

第3回 2008年8月30日(土) 14:00—17:00

講師 御子神慶子先生

(海外技術者研修協会日本語講師)

『みんなの日本語Ⅰ』14課から25課まで

第4回 2008年8月31日(日) 10:00—13:00

講師 田中よね先生

(神戸大学留学生センター非常勤講師)

『みんなの日本語Ⅱ』26課から38課まで

第5回 2008年8月30日(土) 14:00—17:00

講師 澤田幸子先生

(海外技術者研修協会日本語講師)

『みんなの日本語Ⅱ』39課から50課まで

□セミナー参加者から寄せられた感想です。

朝10時から夕方5時まで、びっしり2日間にわたる真夏の集中講座で暑さを忘れた。なにげなく使っている「重さ」と「重み」、「さ」と「み」の違いだけで、中身がどう変わるのか。「何(なに)」を「何(なん)」と読むのはどんな場合か。知りたい疑問、知らない課題が次々と浮かび上がる。長時間にわたるレッスンは、ひとコマごとに新たな発見の連続。疲れるが実に面白い。

『みんなの日本語』は、「テキストの指示に従って順番通りにやったりゃいい」などという安直な気分はどこかに吹っ飛んでしまう。(坂本真司)

『みんなの日本語』テキストを、以前は直接法を意識して授業していました。セミナーで特に語彙を、学習者の母語を使って説明しておられたのを今回取り入れてみたところ、非漢字圏の人には、大変役に立ったようでした。教える方も、直接法にこだわることなく、学習者に有用なものを使ってもいいのだと、気が楽になりました。また、テキストがどのような意図のもとに構成されたのかがよく分かり、提出順序など改めることができました。非常に親しみやすい口調で、不慣れな者にも納得できる説明をしていただけてありがたかったです。(渡辺公江)

第6回 2009年1月24日(土) 10:00—12:00

テーマ 「異文化コミュニケーションのための
共感ロールプレイ」

講師 中島透先生(国際交流基金関西国際センター
日本語教育専門員)



中島透先生

中島先生は4ヶ国の公的機関で14年にわたって日本語教育に従事してこられ、特に、発展途上国の学生のコミュニケーション能力の向上を目指しておられます。セミナーでは、「共感ロールプレイ」の実践を通じて異文化コミュニケーションについて学び、参加者それぞれが教え方を見直しました。

□セミナー参加者から寄せられた感想です。

中島先生の講演では、先生御自身が表情、ジェスチャーなど駆使され、非言語メッセージの有用性を教えて頂きました。

体の全ての部分に表と裏があり、それぞれが大き

く異なったメッセージを伝えているということは私にとっての発見でした。そして、現場でありがちな場面を、ロールプレイで演じることにより、学生の立場の理解ができることを知りました。

私は不満を持つ学生を演じることになりました。演じることで、学生の感情がどのように変化するかという体験ができました。先生に不満をぶつけるのですが、先生の対応から自分に不満を持つ正当性がなくなってくると、素直に自分の非を認められなくなったり、話の論点を変えてみたりするのです。また、自分の正当性が失われると、腹が立ってきたのです。また他の方が演じているところを観察することで、教師の意図、学生の気持ちを客観的にみつめることができました。

学生の感情を確認できるこの方法は、教室内での小さな問題がおこった時に、教師同士でやってみることで、スムーズな問題解決につながると思いました。また、学生同士でさせると学生が自身のもつ傾向(他の学生を省みず話し続ける学生、自国文化の話になると譲らない学生など)を内省させることができるのではないのでしょうか。

今回の研修は、授業においても、授業以外の場面でも活かすことができる、大変興味深いお話を頂いたと感謝しております。(川久保華世)

第7回 2009年3月1日(日) 14:00—16:00

テーマ 「中国語話者に対する単語の教え方」

講師 張 麟声先生(大阪府立大学教授)



張 麟声先生

現在日本では、中国語圏からの留学生が留学生総数の7割以上を占め、今後さらに増加すると思われます。『日中ことばの漢ちがい』など多くの著書で知られる張先生は、中国語話者のための日本語教育の第一人者です。70人近く集まった受講者には日本語教師も多く、すぐ授業に生かせる知識を得た思いが、そのままこの分野への新しい意欲につながる充実した2時間でした。

国際文化講座《KICAセミナー》は京都府、(株)スリーエーネットワーク、(株)にほんごの凡人社の後援により開催しています。

国際交流講座《日本語を教える人のために》

わたしたち日本人が日本語をひとつの外国語として教えるに当たって必要な条件はいろいろあると思われませんが、当協会では1983年から、日本語教師を目指す人にとって必須の科目を選んでこの講座を開いて来ました。講師は各分野に詳しい専門の先生方をお願いします。

実際に大学や公的機関で日本語を教えるに至るには、講座受講後も見学や実習を重ね、資格試験に合格することが必要ですが、初めの一歩としては、楽しく学べる優れた講座ではないかと自負しています。

一方、日本語を一つの言語として学んでみようと思われる方々にとっても、この講座は楽しい勉強の場になるのではないのでしょうか。ご参加をお待ちしています。

□講座《日本語を教える人のために》を受講して

私自身がアナウンサーやDJを目指す人のための塾を主宰していたことから、反対に、外国語としての日本語をどういう方法で教えるのだろうかという点に興味を持ち、受講し始めました。

ところが、日本語というものを多角的に深く研究しておられる先生方の講義内容は、毎週“目から鱗”の連続で、学生時代にも余りしたことのない「復習」を自宅に帰ってからするほどでした。

日本語を教えるということはどういうことなのか。一年間でその根源に少し近づけたような気がします。

2009年度講座カレンダー

国際交流講座

——日本語を教える人のために

2009		講座Ⅰ — 日本語を知るために	
1	4・21	日本語の世界	玉村文郎
2	28	ことばのしくみ	吉田和彦
3	5・12	発音・アクセント	壇辻正剛
4	19	日本語の文法	加藤久雄
5	26	日本語の文字・表記	大島中正
6	6・2	敬語とやりもらいの表現	浅野敏彦
7	9	国語教育と日本語教育	糸井通浩
8	16	海外の日本語教育	中野佳代子
9	23	日本語の語彙	玉村文郎
10	30	日本語教育の術語の解説	玉村文郎
2009		講座Ⅱ — 日本語を教えるために	
1	9・8	日本語の言語行動	金田一秀穂
2	15	誤用例研究	玉村禎郎
3	29	文型の指導	鈴木睦
4	10・6	日本語と英語の対照	山内信幸
5	13	日本語と中国語の対照	名和又介
6	20	日本語と韓国語の対照	泉文明
7	27	入門期・初級の指導	吉田恵子
8	11・10	音声の指導	土岐哲
9	17	日本語教授法	松井嘉和
10	24	日本語教育と辞書・事典	玉村文郎
2010		講座Ⅲ — 日本語を考えるために	
1	1・12	日本語教育史と日本語教育事情	玉村文郎
2	19	言語と認知	山梨正明
3	26	日本語と日本文化	前田富祺
4	2・2	コミュニケーション・ギャップ	乙政潤
5	9	日本語と日本社会	真田信治
6	16	外から見た日本語・日本文化	K.シュベネマン
7	23	国際交流と日本語教育	未定

会場：京大会館

日時：毎回火曜日 6:30～8:30 p.m.

協会年会費：¥5,000

受講料：講座Ⅰ ¥20,000 Ⅱ ¥20,000 Ⅲ ¥14,000

これからは外国の人にも自分の日本語を伝えられたら
と思うと同時に、退職後60歳にして母語であり、仕事
でもあった日本語を改めて見直すことができました。

(豊田一美)

国際交流講座《日本語を学ぶ人のために》

「やさしい日本語」教室

1989年京都市国際交流会館が開館し、日本語教室が
開講されることになりました。当協会は、主催者の京
都市国際交流協会から依頼されて、教材開発と講師派
遣を担当し20年が経ちました。

以来この教室を訪れた学習者は数え切れないほど。
その立場や国籍（この数年でざっと数えて70余カ国）
の違いを反映して、クラスの雰囲気は様々ではありま
せんが、最近感じることは、日本語の世界への広がり
です。留学生や日本研究者はもちろんのこと、そうで
はない来日したばかりの人がすでにひらがなの読み書
きができたり、日本語学習の意欲が高いことに驚かさ
れます。われわれ講師陣は、雨にも冬の寒さにも負け
ず通ってくるかれらの意欲に応えるために少しでもよ
い授業をと心がける毎日です。

(海田礼子)



"Yasashii Nihongo" Class at KICH

外国人留学生交流プログラム

京都在住の外国人研究者、留学生、またはその家族
のために千玄室理事長の支援を得て、伝統芸能の鑑賞
や料理を通じての交流、日本語学習の支援などを行っ
ています。

Japanese Language Classes for Beginners at KICH

KICH and KICA co-organize Classes in Japanese
language for the newcomers. Each course (12 weeks)
starts in April, July, October and January.

●Schedule:

The First Step in Japanese

(A) Every Friday 13 : 30-15 : 30

(B) Every Friday 18 : 30-20 : 30

The Second Step in Japanese

Every Friday 18 : 30-20 : 30

●Place: Kyoto City International Community House

●Fees: ¥6,000/12 weeks

For further information, contact

KICH (<http://www.kcif.or.jp/>)

or KICA (<http://kicainc.jp/>).

Programs for Students and their Families from Abroad

Supported by Dr. Genshitsu Sen, KICA offers tailor-
made Japanese lessons, by licensed instructors and vol-
untary teachers, theatergoing to Kabuki and Bunraku,
and the joy of cooking with students from abroad.

Private / Small Group Japanese Lessons

I usually take care of the private lessons at KICA.
Actually, I taught three students from Poland,
Switzerland, and the U.S. last year. As each of them was
different in their ages, backgrounds or proficiency, they
found my private classes intensive and easier to concen-
trate on their studies. I am still working hard so that my
class will be interesting and secure for my students.

(Rumiko Kawai, Licensed Instructor)

Fees: 2,000yen/hour

Private / Small Group Japanese Lessons

by Voluntary Teachers

You will find this lesson fun and valuable as it will be
carefully and flexibly tailored and scheduled to meet
your needs.

Place of Study: Room 116 at Kyodai Kaikan or a small

日本語《個人／小グループレッスン》

個人レッスンを希望される学習者を担当させていただいています。学術振興会の語学研修の枠組から来られる方、ホームページを通して来られる方など、お出合いの仕方はいろいろですが、この1年も、ポーランド、スイス、アメリカからの方方を担当いたしました。年齢、バックグラウンド、レベルなどいろいろですが、どの方とも良いご縁が生まれ、楽しく進めています。1対1の集中や密度を活かし、日本語を安心して学んで頂けるように努力しています。(河合瑠美子)
費用は1時間2,000円です。

ボランティア教師による日本語《個人レッスン》

2007年度から、国際交流講座「日本語を教える人のために」の修了生を対象にボランティア教師の登録を募ることになりました。2年目の現在、ボランティア登録者は31人。皆さん熱心に誠意をもって教えられますので、学習者からの紹介で希望者がどんどん増えています。現在10ヶ国、24人が楽しく勉学中です。
詳しくは協会事務局へお問い合わせください。

- ・場所は京大会館116号室の事務局と京大会館近くの民家です。
- ・学習内容、教材、時間帯などは、ひとりひとりの学習者と相談して決めます。
- ・費用は1回90分で500円です。

让我们一起来学习日语吧！KICA 京都国际文化协会的志愿者老师们开设了别具特色的日语课程讲习班。有针对个人学习者的「一对一讲习」以及少数人的「小班级讲习」两种形式，供你自由选择。现已开始报名。

地点：京大会馆 116 号教室,或京大会馆附近的教室。
学习内容教材及时间等：均与学生一起商量决定。
费用：一次 90 分钟 500 日元。
有兴趣者请与联系我们。

KICA, 교토국제문화교류문화협회에서
일본어강사가 자원봉사로 개인, 소그룹 레슨을
시작합니다.

□ 장소 ; 교토대학회관 116 호실 또는 교토대학회관

근처에 있는 교실

□ 학습내용, 교재, 시간은 수강자와 상담해서
결정합니다.

□ 비용은 500 엔/90 분/1 회
관심 있으신 분은 연락 바랍니다.

□ ボランティア教師と学習者からのクラス報告です。

私は、この多文化共生社会の中で、いろいろな国の
人たちとつながりを持って生きていくために日本語教
師になりたいと思い立ち、2007年度のKICAの「国際
交流講座—日本語を教える人のために」を受講しまし
た。

今は週1回のペースで、KICAで日本語ボランティ
アをしています。台湾から来ている二人の青年に、一
人ずつ教えていますが、二人とも、会話を学習したい
ということなので、テキストを使いながら、そこに出
てくる文型を利用して会話練習を進めています。

話の中には、台湾の人たちの生活習慣や日本での生
活との違いなどが出てきて、私自身、とても勉強にな
ります。普段、日本の人たちが何気なく使っている
「日本語」について質問を受けることがありますが、そ
の度に、その日本語を使う場面や意味が学習者にうま
く伝わるように、実際の生活の場面を通して説明する
ように心がけています。このレッスンを通して、彼ら
がいろいろな場面で心の通った日本語会話ができるよ
うになること、また、彼らが日本とかかわって生きて
いくことへの手助けになればと思っています。

(志和晃二)

日本人と話す機会が少ないので、この個人レッスン
で日本語を教えてもらってよかったと思います。先生
は熱心で、とても真面目です。習ったことは役に立ち
ます。話す練習や日本の生活について、とても勉強に
なります。

(潘熙徳)



Private lesson at the Machiya classroom

昨年7月から、ボランティアで日本語レッスンのお相手をしています。私自身、外国で生活をした時に、現地の人ともっと話をする機会が持てたら…と感じたので、ボランティア・レッスンの趣旨に賛同しました。

レッスンを進める中で、母語である日本語について多くのことを「発見」させられます。言葉に限ったことではなく、習慣や考え方などについてもそうです。

また、学習者の、日本の言葉や文化を学ぶ真摯な姿勢には本当に頭が下がります。こちらも非常に刺激を受けます。教える能力をもっと高めたい、彼らの背景である、彼ら自身の文化について理解したいと感じさせられます。ボランティア・レッスンは、日本語学習者が学ぶ補助的な手段であると同時に、日本語を教えようとする日本人、異文化を学ぼうとする日本人にとって貴重な機会であると考えます。

昨年末、韓国を旅した際には、すでに帰国していた生徒さんと再会することができました。レッスンを通して得た「縁」、今後も大切にしていきたいと思います。

(上野和美)

国際茶会

第28回「国際茶会」が秋晴れの10月18日(土)裏千家茶道会館で開かれました。準備の整った三席の茶室はお客を迎え、凛とした気配が漂います。西島安則京都国際文化協会会長のご挨拶で茶会が始まりました。裏千家で研修中の留学生により紅葉をうつしたお菓子が運ばれ、静けさの中、一人ひとりにお茶が振舞われました。床の間の掛け軸、香炉、秋の草花。そして、さまざまな茶道具について質問が出る頃、茶室の中は和やかな笑顔で一杯です。30ヶ国から日本を訪れ、京都大学などで学ぶ留学生を中心に250名のお客は「一碗の中に見た平和」を心に、満ち足りて家路を辿りました。

別棟の資料館で開かれていた秋季特別展「鎌倉時代の喫茶文化」も好評で、席入りの前後を豊かな気持ちで過ごされる方々で賑わいました。

第28回国際茶会は(財)今日庵・(社)茶道裏千家淡交会・(財)国際茶道文化協会・(財)京都国際文化協会・(財)京都府国際センター・(財)京都国際交流協会の後援により開催されました。

machiya room near Kyodai Kaikan.

Time and Contents: To be carefully scheduled after an interview with you.

Fees: ¥500 for 90-minute lesson

Contact KICA for further information.

International Tea Gathering

On Saturday, October 18th, the 28th Annual International Tea Gathering was held at the Chado Kaikan, Urasenke. Professor Yasunori Nishijima, Chairman of KICA, greeted the first group of guests and expressed his acknowledgement to the Urasenke Foundation. A bowl of tea was made and served together with autumnal sweets by the Chanoyu trainees of Urasenke from eleven different countries.

Later, the guests asked questions about the scroll, the incense burner, the flowers on the alcove or all the curious Chanoyu utensils, and each tea room was filled with sociable atmosphere. All the guests, including university students from thirty different countries, left for home with "Peace in a Bowl of Tea" in their hearts.

"2009 Fall Exhibition" at the Chado Research Center on the Urasenke Complex was also fully enjoyed by the guests

International Tea Gathering was co-sponsored by the Urasenke Foundation, Chado Urasenke Tankokai, KICA, UIA, Kyoto Prefecture International Center, and Kyoto City International Foundation.



International Tea Gathering

違うからこそ面白い、面白いからこそ理解が深まる



アイニンソフィアワティ

私はインドネシアで日本語教育を専攻し、日本語だけでなく、日本の文化と日本の社会についても勉強した。日本の文化や社会について私が学んだことは多くあった。一つは日本とインドネシアは違うところがたくさんあるということである。日本は単一民族、単一言語が見られる国である。一方、インドネシアは文化・言語などにかなりの相違が見られる国である。一つの国の中で細かく分けると、740もの民族があるインドネシアはもちろん世界最大の多民族国家である。日本とインドネシアの一番大きな違いはインドネシアは多様な民族と宗教から構成されているということである。インドネシア人はそれぞれの宗教をもっている。日本では信者の多い宗教は仏教と神道である。日本人は宗教的行事には大いに参加するが本当に信者というわけではないそうである。日本人が結婚する時はたいていキリスト教で行い、葬式は仏教で行うということを平気でやっている。これは日本では一般的に見られることである。このように日本人が日常生活と宗教とを分けて考えていることはインドネシア人にとっては驚きである。なぜなら、一般のインドネシア人は宗教というものが態度、習慣だけでなく、自分の生き方にも影響している。

3年間ぐらいインドネシアで日本語を勉強して、ようやく1年間日本語日本文化研修留学生として、日本へ来ることができた。日本に来る前に、いろいろ日本のことを聞いた。日本に行ったことがある先輩の話によると、ホームステイした時、先輩は、袖の長い服を着てスカーフをかぶっている格好を見たホームステイ家族に「あなたはアフガニスタンのように、狂信的なイスラム教徒ではないよね」と聞かれたことがあるそうである。さらに、私のインドネシアの先生は日本に行く予定であったが、突然日本の政府からはっきりわけを説明されずに日本に行くその予定が中止になったということがあったそうである。このインドネシアの先生は「日本に行く準備の何が悪かったのか」と自分の胸に聞いた末に、なんとなく中止された理由がわか

るようになったそうである。パスポートの写真である。そのパスポートの写真に先生は顎鬚を蓄える姿で写っていたのだが、ちょうどその頃はテロリストのことにメディアを通じていろいろ報道されていた時期だったのだ。おそらく、この写真が典型的なテロリストに見えてしまうと判断した日本の政府は、日本に行く予定を中止させることにしたのだと先生は思ったということである。

この話を聞いて、私は日本に来る前に、心配なことがあった。2001年9月11日にはニューヨークで、アメリカの政府によるとイスラム教徒が起こしたという歴史的なテロ事件が発生していたが、そのことをきっかけに、外国に住んでいるイスラム教徒に対するその国の人々の印象は悪くなるばかりのようであったからである。ひどい場合には、差別が発生することもある。そのために、日本に住むなら、私はイスラム教徒として、一般の日本人に悪い印象を持たれる恐れがある。しかし、大学の先生は私にこう言った。「アイニン、日本は他の国と違う。この事件の後で、イスラム教徒に少し恐怖を感じる日本人が何人もいるかもしれない。だが、すべての日本人がそう思うわけではない。しかも、今まで、日本に住んでいるイスラム教徒は差別されたことがない。もし日本で、イスラム教徒と、日本人との生き方が全然違うばかりに、アイニンに恐怖を感じる日本人がいたら、前向きに考えて、いいイスラム教徒を証明してください」。この先生の言葉を聞いて、私は前向きに考えるようになって、日本に来た。

私は日本に住み始めてからもう10ヶ月経った。この10ヶ月の間に、私が日本社会の中で経験したことから、私の生き方が、日本人にとって目立つと感じられたいくつかの点について書き記したいと思う。

まず、私の格好について述べてみよう。日本人は私の格好を見て、何か疑問を持つはずである。自転車に乗る時や、電車に乗っている時や道を歩く時など、私は日本人に変なふうに見られている。特に、夏の時、日本人の友達ほぼ毎日「アイニン、そんな服装で暑

くないの？」と声をかけてくる。さらに、今年の4月に私は剣道部に入ったのだが、こんなこともあった。剣道部員は私に「スカーフをかぶっているままでかまわないけれど、靴下は脱がないといけない」と言ったのである。他の人には手と顔しか見せないというルールがあるから、どうしても靴下を脱ぐことができないと私は説明した。剣道部員はこの理由を認め、やっと剣道部に入ることができた。最初はこんな格好で剣道部に入れないと思っていた。だが、お互いの違いをすぐ理解ができ、嬉しかった。この格好で剣道を練習する時、ものすごく暑いが、先輩方はいつも「ファイト」と励ましてくれて、がんばれるようになった。日本人の仲間もたくさんできたとし、日本の武道を練習できて、本当に楽しかった。

次に、断食について述べてみよう。私は去年の10月3日に日本に着いたがその日から10月12日まではまだ断食中であった。私が断食中だということを知った日本人の方はびっくりした。その時に、こんなやりとりがあった。「アイニン、一緒に御飯を食べよう」「1か月の断食中だから、何も食べられないんだ」「1か月の断食？でも、水ぐらい飲めるんだよね、死んじゃうよ」と日本人は目を丸くして言った。「水もダメなんだ、日中はね。でも日が沈んだら普通に食べていいよ」と私は説明した。

また、私は毎日5回礼拝をしなければならない。夜明けの礼拝、正午過ぎの礼拝、午後の礼拝、夕方の礼拝と夜の礼拝である。大学に通い始めて2週間ぐらいは、正午過ぎの礼拝の時間が来ると、毎日寮に戻っていた。しかし、毎日、寮に戻っていると疲れるので、大学の事務所に礼拝のために学校の空いている場所を貸してもらえないか頼んでみた。そしてやっと学校の保健センターの中に空いているところが見つかった。インドネシアでは各地にかならず小さいモスクがある。一方日本ではモスクがないので、出かけている時や散歩している時に礼拝時間が来ると、私は駅とかデパートで礼拝をするほかない。もちろん、変なふうに見られたが、だんだん慣れてきた。あるデパートで礼拝中に、あるおばあさんに声をかけられた。「あのう、何をしていますか。」わたしは礼拝をやめて、そのおばあさんに礼拝のことを少しだけ説明してから、礼拝をやり直した。あるデパートの警備員にも声をかけられたことがある。きちんと説明すれば、だいたいの日本人の方は理解してくれる。

最後に、食文化のことである。日本は「食のタブー」がほとんどない国である。インドネシアでは「食のタブー」がある。それは豚肉と酒である。おそらく、日本人は「味の素事件」のことをご存じだと思う。豚肉禁止がいかに強い拘束力を持つのかということは、2001年1月にインドネシアで起こった「味の素事件」の例を考えてみると分かるだろう。現地合弁会社が豚肉から抽出した酵素を使用したとして、日本人社長らが「消費者保護法違反」のかどで官憲に逮捕された。このことからうかがえるように、イスラム教徒における豚肉はタブーである。イスラム法では、一切豚肉と酒を口にしないことが定められている。なぜかといと、イスラムでは肉体を大事にするとともに、精神を大事にすることが重要とされているからである。肉体を大切にするためには、不浄で悪い食べ物は避けなければならない、その一つが豚肉に当たるわけである。酒が悪いのは、肉体を害するだけではなく、精神も錯乱させるからである。豚肉エキスと酒を含んだ日本の食べ物は少なくないので、日本人が日本に住むイスラム教徒がどのように生活するのか、どんなものを食べるのかという疑問を持つのも当然である。私には食べ物を買って食べる前に原材料名を読む必要がある。もし、食べられないものが入っていたら、買わない。日本で買い物するのがはじめてだったので、大変であった。はじめの1か月は買い物をするたびに、食べられない原材料名の書いてあるノートをいつも持って行っていた。原材料名の漢字で読み方が分からないものがあったら、スーパーの人に教えてもらった。1か月経つと、ざっと原材料名を読むだけで、食べられるか食べられないかすぐ分かるようになった。そして、友達が食べ物をくれる時、食べられなくて断ったことがある。友達をがっかりさせないように、理由を説明した。しだいに分かってもらえるようになった。それから、冬休みの時に、日本人の先生の家で3泊ぐらい泊めてもらったのだがその時は私が頼まなくても、全部たべられる料理を作ってもらった。すごくおいしかった。イスラムの食文化には日本の食文化と同じところもある。日本では食事の前に「いただきます」、食事の後に「ごちそうさまでした」と言う。インドネシアの文化では食事の前と食事の後に特別な言葉を唱える文化はないが、食事の前に「ビスミラー」（神様の御名によって）、食事の後に「アルハムドリッター」（神様に讃えあれ）と言うことがある。

私は日本に来るまでに、日本人は単一民族なので、違う生き方や違う格好をしている人を受け入れにくい国だろうと思っていた。たしかに、私の違う生き方や格好にたいして、度々変なふうな顔で見られたり、考えられたりした。しかし、実際に日本人と触れ合ったら、これは単に好奇心を持っているからだと分かるようになった。また、メディアがイスラム教徒は狂信的というイメージを作り出しているということも聞いたが、10か月ほど日本に住んでいる間には、一度も差別されたことはなかった。また、日本人が私に対して恐怖を感じて、距離をおくことも一切なかった。逆に、日本人のほうから私のところに来て、興味深くいろいろなことを聞くようになった。このことをきっかけと

して、お互いに理解し合うことができるようにもなった。このように日本に来る前の日本人に対しての印象と今の印象は大きく変わった。

このエッセイは相違を理解してくれる日本人の方と先生方と留学生の友達のために私が心から感謝の気持ちをこめて書いたものである。このように相違を理解してもらうことは、大きいものも小さいものも私にとってありがたかった。心から感謝したいと思う。

参考文献

ハッジ・アハマド・鈴木 (2007) 「イスラムのことがマンガで3時間でマスターできる本」明日香出版社
磯貝健一 (2003) 「異文化知る心」世界思想社

私の第二の故郷、日本の今

二つの故郷

私はブラジル生まれの日系三世です。幼い頃から祖父母に日本の話を多く聞かされて育ちました。そんな私にとって、日本は憧れの国であり、第二の故郷でもあります。外国で暮らす他の多くの日系人にとっても、日本はそのようにとても大切な国なのではないかと思えます。

生まれ育った国だけではなくて、もう一つの故郷があるということは、本来幸運なことであるはずですが。しかしながら、私は、二つの国にまたがる自分自身のアイデンティティが捉えがたく、長い間悩みました。日本人の姿をして、日本人と同じ血が体に流れています。さらに、小さい頃は、ブラジルの言語であるポルトガル語よりも日本語の方が得意でした。それなのに日本人ではない、という事実には何度も苦しみました。この外見のために、そうして日本語で話が出るために、ブラジルで外国人扱いされたこともあります。ところが、日本では逆に、姿は似ているのに外国人(ブラジル人)なのです。生まれ育った国に打ち解けられない自分がいて、また先祖の国にも馴染めない自分

真砂・クリスティーナ・さゆり



がいました。いったい何者なのかが分かるまで随分と時間がかかりました。しかし、今は、日本人の特長を持ったブラジル人である自分が好きです。そうして視点を少し変えてみると、こんな素敵な故郷を二つも持っているのは、私にとっても幸運なことだと思えるのです。

来日時の落胆

もし私が日本に来ることがなかったなら、日本への憧憬は憧憬のまま私の中で生き続けていたかもしれません。しかし、私は日本への留学の機会を得て、富山県の県費奨学生として日本で暮らし始めました。初めて日本へ来た時、私は大きなショックを受けました。それまで日本へ行ったことのある人達に、「あなたの思っているような所ではないよ」と言われていましたし、年月が経ち、祖父母が暮らしていた頃とは変わっているだろうとも思いました。しかし、予想をはるかに超えて、祖父母から聞いて憧れていた国は、実際にはその面影しか残っていなかったのです。とても戸惑いました。変わっていると言っても、眼で見ることの出来

る範囲だけではなく、もっと深い所が違っているような気がしました。

例えば、ブラジルでお年寄りによく聞かされた日本人としての誇りとか、先祖への感謝の気持ちとか。もう日本ではそのようなことを言うこと自体が時代遅れなのではないでしょうか。でも、少なくともブラジルへ移民した日本人はそれを守り、子孫へ伝えてきました。ですが、日本へ来てからはその誇りをどう持っているのかよく解らなくなる時があります。

祖父母や両親に、日本人として恥ずかしくないように振る舞いなさい、と言われて育った私にとって寂しいことです。まず、自分の先祖や祖父母を尊敬し、自分より経験豊富なお年寄りを労わるべきだと教わりました。彼らがいるからこそ今の私達の生活があるのだから。そして、困っている人とか何か不自由な人がいたら助けるべきだと教わりました。人間は一人で生きているわけではないのだから助け合っていかなければいけない。でも、助けてもらうのを待っているだけではいけない。負けないで、諦めないで最後まで頑張る。これは日本人として当たり前なことだと思って育ちました。私は、日本人としての誇りとは、人々を思いやり、頑張ることだとずっと思ってきましたが、今の日本の若い人達は、お年寄りを尊敬するどころか、粗末にしているようにさえ思えます。バスなどでよく見かける光景ですが、足腰が弱っている老人が乗って来ても、乗る時に手を差し伸べないだけでなく、席を譲ろうとする人もいません。多くの人が見て見ぬふりをしているように思います。そんなことはブラジルでは考えられません。誰かが必ず席を譲ります。お年寄りを蔑ろにする日本人の姿を目にして、日本への憧憬の中で育った私達は、何を誇りにすれば良いのでしょうか。

私の願い

日本人の若い方達には周りにあるさまざまな物をもっと大切にしてほしいと思います。自分たちがどれ程素晴らしい所で暮らしているのか、どんなに立派な人達のおかげで今の生活が出来るのか、ということに気付いてほしい。長い歴史の中で生まれ、磨かれ、伝えられてきた文化や芸術を守りながら日本人である誇りを次世代にも伝えてほしい、と切に願います。

日本人よりも多くの外国人の方達が日本の文化は素晴らしいと興味を示すのを見ると、本当に寂しくなり

ます。琴や三味線の音色、日本舞踊や歌舞伎のその独特な動きと表現力、焼き物や彫り物の美しさなど、日本人が受け継ぐべき知識や技術、それはある意味日本人の宝であり、個性でもあると思います。しかし、今は、アメリカの流行やジャンクフード、ヨーロッパの技術とか、外にばかり目を向けているようにさえ思えます。もちろん他国に興味があるのは良いことですし、新しいものを取り入れ変化することが悪いとは思いません。でも、アイデンティティのないまま、ただ他の文化や習慣、考え方を取り入れることが、同時に自分のあり方、素晴らしさを見失うことになってしまっは、とても残念です。

ブラジルには、世界各国からの移民がいて、その文化や習慣が合わさって出来ています。そのような国と日本を同じに考えるのは無理かもしれません。しかし、日本が好きだからこそ、日本で長い年月の中で育ってきた習慣や文化や良い価値観は、決してなくならないでほしいと思うのです。

ブラジルの場合だと、さまざまな国の文化が混在しているのが特長であり、それがブラジルの個性だと思います。そんな社会の中で日本の習慣や文化は色濃く残っています。遠く離れた国で生活する日本移民、日系人達が、自分の故郷を忘れないために親から子へ、または祖父母から孫へと伝えてきたものだからです。もちろん形ある物だけではなく、考え方や志も伝えられてきました。

移民がもたらした故国の文化や言語は、それらがもたらされた当時の形や内容がそのままに、あるいは少し美化された形で残るのかもしれませんが、それは、新たな土地で人生を築いていった移民達の支えともなったことでしょう。しかし、移民達の故国は、時の流れと共に変化をしていきます。そこに住む人達にとっては、他国に赴いていった人達が守ってきた伝統や考え方は、ただ単に古い時代のものとし映らないのかもしれませんが。ブラジルを訪れたある日本人から、こんな言葉を聞いたことがあります。「こんなに遠く離れた所で戦前の日本を見るとは思わなかった。」ブラジル人である私は、日本の文化の一部がブラジルの文化となりつつあるという事実に感銘を受けます。しかし、ブラジルの文化となりつつある日本文化が、日本に暮らす日本人にとって、ただ単に古い時代のものであって自分達にとって無縁なものであると感じられるのなら、私の祖父母や父母の世代の日系人も私の世代の

人々も、哀しさを感じずにはいられないでしょう。日本文化の素晴らしさを今一度共有するにはどうしたら良いのでしょうか。

日本の今を思う

外国に暮らすということは、その国の文化や社会への個人の理解が、徐々に進化していく過程であるのかもしれない。来日時の落胆から始まった私の日本文化への思いは、もう少し客観的で、さらに肯定的なものへと変わってきました。

まず、日本人の伝統的な価値観とか国民性が失われつつあるのではないかということは、私のようなブラジルの日系人だけではなく、日本人自身も問題にしていることに気付かされます。例えば、私がこのエッセイを書いている時に、「消えゆく勤勉さ」と題して、読売新聞社の世論調査における勤労観に関する結果が同新聞紙上で発表されました。(7月31日読売新聞12面)その発表によれば、「一生懸命に働くことは美徳だ」という考え方に「そう思う」と答えた人が71%に上ったものの、日本人の勤勉さが「これからも続く」と答えた人は35%であり、「続かない」と答えた人が61%に上ったそうです。1984年から今回までの調査で見られた両者の率の推移も掲載されていて、日本人の勤勉さが「続かない」との悲観的な見方が徐々に高まり、1990年代に「(勤勉さが) これからも続く」と答えた人の割合を上回るようになったことが分かります。どうしてこのような変化が起きているのか、また、こうした意識の変化は実際の勤労に関して何を意味するのか。社会の制度や構造や状況の変化にも思い及ぶ難しい問題ですが、日本社会の変化の只中に生きている日本人の姿を実感することができます。

さらに、私は、日本に来てから、ブラジルとは随分違うということを感じることが出来るようになり、日本の新たな魅力の発見を体験しています。日本には四季があって、春には桜、春から夏に向けて梅雨、秋には紅葉、そして冬には雪景色、という風に変化を見せてくれます。四季の移り変わりに伴って、食器の種類や彩り、服装の柄や色が変わります。そして、日本の民族衣装の使い分け、例えば夏には涼しげな甚平や浴衣を着ている人も見かけます。とても素敵です。出来れば、浴衣だけではなく、着物を着る機会がもっと増えればいいと思います。このような季節の変化に対する心遣いを見ると、日本に住む人々の生活が、古く

から自然と深く関わりあっているのがよく分かります。それは、厳しい自然に逆らうのではなく、自然を敬い、自然とともに生きてきた証なのだと思います。

食材なども季節によって変わります、勿論、出される料理も違います。その中でも特に楽しいのは、和菓子です。季節に合わせて、色や形、味までもが違います。本当に職人が作り出す芸術品です。食べるのが惜しくなることがあります。

その時節に一番美味しい物を食べる、それはその土地をよく知っているからこそ出来ること。食文化を通じて多くのことが分かります。日本のように冬の厳しい国では、冬を過ごすための野菜や他の食物を保存するための技術があります。その結果として、漬物とか煮干、野菜の干した物を使う料理とかを味わうことが出来ます。

日本の食文化をブラジルと比べてみると、二つの国にあまり共通点がないのが分かります。ブラジルでは保存のため塩や砂糖などの調味料が多く使われています。魚や肉も塩をまぶして干して保存します。そして使う前に水に浸けたりお湯をかけて塩抜きをして使います。干し肉料理は私の好物です。年中暑い北の地域では、唐辛子とかブラジ尔特産の油を地方の名物料理に使います。辛くて、食べ慣れない人にはあまりお勧めできませんが、美味しい料理です。それから、果物の種類の多さには驚かれると思います。ジュースやシャーベットなどで楽しむことも出来ますし、果物によっては、煮て食べるもの、ご飯と混ぜて食べるものもあります。私が食べたことのないようなものもたくさんあります。

日本へ来てからというもの、ブラジルに対する自分の知識の無さを思い知らされました。食べ物の話をしてもどういう風に作るのか分からないものがありますし、地名を聞いてもどのような場所か分からないので説明が出来ないこともあります。ブラジルは広い国なので全部覚えるのは大変だとか言うのは簡単ですし、納得もしてもらえますが、私は自分のことが情けなくて恥ずかしいです。あまり身近にあるものには気がつかないものだ、とよく言われますが、ブラジルにいた時はあまり気にならないものとか周りに普通にあるものが遠く離れた日本で改めて大切なものだと気付きました。本当に大事なものは、いつも近くにあって当たり前なもので、無くなった時に初めてそれだと気が付くのかも知れないですね。地球の反対側まで来るとや

はりブラジルの青い空やどこまでも広がる大地や食べ飽きたはずの料理が恋しいです。それと同時に、ブラジルのことをもっと勉強しなくてはいけないと思いました。もしかして、ブラジルへ移民した日本人の方達もこんな気持ちで日本の文化をブラジルの人々や子孫に伝えようとしたのでしょうか。

私が今感じ取っている日本の魅力をもうひとつお伝えしたいと思います。それは日本の方言です。残念ながら私の祖父母は方言を使わなかったので、私も教えて貰えなかったですし、日本語の学校では標準的な日本語しか習いません。ブラジルでは方言を聞く機会はありませんでしたので、日本で方言を聞くとワクワクします。方言で話をしている時、人々はいつもより生き生きと自由に話をしているように見えます。ブラジルでも地方によって話し方や単語が違います。特に言葉の発音とリズムが異なり、それはその地方の生活の影響が大きく、例えば、田舎ではのんびりした口調で、サンパウロのように忙しい毎日を送っていると話し方までが慌ただしい感じです。日本の方言もその地方で暮らす人々の生活がよく表れていると思います。

マスメディア

私が14歳の時の親からの誕生日プレゼントは東京ディズニーランドの旅でした。その当時の中国は発展し始めたばかりで、一日中遊べる遊園地がなかったので、私は日本のディズニーランドに行って、とても驚きました。14歳の女の子にとってそれは本当に夢の世界でした。夢の中にしかいないはずのお姫様と私は一緒に写真を撮りました。アニメの中にしか出てこないはずのミッキーは目の前に立っていました。写真館で白雪姫のドレスに着替えたなら、私は本当のお姫様になった気がしました。そして店員のお姉さんの笑顔もとても

おわりに

ブラジルで守られている日本の習慣や文化から見れば、現在の日本において古き良き文化が失われつつあることを嘆かざるを得ません。日本の若い人達がどうすればこの嘆きを理解してくれるのかと考えます。しかし、日本は古い時代の良さを失っただけの国ではありません。人と自然との共生や季節の移り変わりと共にある独特の食文化など、素晴らしいものがあることを、日本に来て初めて実感することができました。それを知ることによってブラジルを新たな目で見ることができるようになったように思いますし、国の境を超えて人々に共通するところにも気付き始めています。また、人々の価値観の変化は、日本に住む人々にとっても真剣に扱われる問題であることにも思いが及ぶようになりました。

留学を終える頃までに私自身の日本への思いがさらにどのように変化していくのか、楽しみであり、もっと勉強を重ねたいとも思います。私が今自信をもって言えるのは、日本もブラジルもとても素敵なお国だということです。そして私にとっては他にない大切な所です。これまで以上に交流関係を深め、お互いの文化を理解し合いつつ、二つの私の故郷が仲良く平和である事を心から願っています。



劉 慧子

素敵でした。その旅は私にとって今までで一番素敵なプレゼントとなり、その時から、私の心の中の日本はディズニーランドのようなきれいな国になりました。

高校を卒業して、地元の大学に入り、単調な日々を送る中でいつしか「外の世界を見たい」と強く思うようになりました。特に世界のトップに立っているアメリカに憧れました。親に打ちあけたところ「日本はどうだ、近いし」と日本への留学を勧めてくれました。その一言で、私の心の中に眠っていた14歳のときの記憶が蘇りました。新幹線、高層ビル、ディズニーラン

ド、店員さんの笑顔……。私は海洋環境か、自動車工学のどちらかを学びたかったので、その目的のためにも日本は私にとって理想の国のように思えました。

しかし、私が日本に留学することを聞いた友達や近所の人たちは、私に日本へ行くのをやめるよう忠告してきました。日本では中国人は軽視されたり、差別されたりなど辛い目に遭わされるというのです。それを聞いて私も戦時中の日本人の残酷な行為などを教科書で読んだことを思い出しました。また毎年、靖国神社の問題は中国で大きな騒動を起こし、テレビでは「戦争を起こし、アジア各国の人々の感情を深く傷つけ、いまだに反省しない日本人の態度を絶対許せない」など連日のように報道します。私は14歳の時に見た美しい日本と、テレビや教科書、近所の人たちの話から想像される傲慢で恐ろしい日本—このような二つの矛盾した印象と留学に対する期待と不安を抱きながら、意を決して日本に渡りました。

日本での住まいは東京など大都市ではなく、富士山のおもとにある甲府という静かな町でした。桃やぶどうの生産量日本一を誇り、南アルプスのおいしい水に恵まれた、とてもきれいなところでした。私が通っていた日本語学校は、日本の高校や専門学校が隣接していて、多くの日本の高校生や専門学校生とすれ違いましたが、知らない子によく「こんにちは」と挨拶されました。来る前に言われた「中国人は日本で軽視される」などの話とは全然違いました。私はもともと活発な性格で日本では言葉がよくしゃべれなくても、スポーツという共通の切り口から友達を作り一緒に遊んだりしながら日本語を学べたと思います。会話だけではなく、一緒に遊んだり勉強する過程で同じ仲間として見てもらえた時は心から嬉しかったです。日本語がしゃべれるようになると、私はアルバイトを始めました。一緒に仕事をする仲間たちだけでなく、常連のお客さんも自家製の果物や野菜、冬の焼き芋などをよく差し入れてくれました。友好的な日本の人々のおかげで、私は寂しい思いをひとつもせずに、この国で私の人生に大きな影響を与える大学生活を過ごすことができました。

中国に一時帰国するたびに、よく親戚や友達に「日本はどうですか？」と聞かれるのですが、「テレビや雑誌などに載っている日本は嘘ですよ。日本人は結構親切だし、日本は生活しやすい国ですよ」と私はいつも答えています。何で私が今みている日本と中国で聞い

た日本にこんなに大きな違いがあるのでしょうか、私は中国のメディアに疑問を持ちました。

私は今年日本で就職活動を行いました。私は車が好きで、自動車メーカーの就職を希望しました。面接の時に面接官の方はよく「日本はどうですか？」という質問をしました。「自動車技術が発達し、きれいな国です」と私は迷わずに答えましたが、ある面接官に「僕は中国に行ったことがあります、いく前のイメージと全然違って、とてもよかったよ」というふうに言われました。私はちょっとびっくりして、思わず「以前のイメージってどんなイメージですか？」と面接官に聞きました。「失礼ですが、以前、中国人は結構身勝手に、日本人に対する敵意が強いという印象があったね」と面接官が言いました。

中国と日本は一衣帯水、昔からいろんな交流を行いました。今、情報伝達手段がこんなに発達しているのに、中国人と日本人はお互いの国のことを全然正しく理解していないことに私は驚きました。どこに問題があってこんな結果を招いたのでしょうか。私は自分の経験から、両国のマスメディアに注目しました。

私が日本に来て少しずつ日本語がわかるようになるにつれて普通のニュースを見たり、新聞を読んだりするようになりました。そこで日本メディアの報道の仕方と視点は中国と大きな違いがあることに気づきました。

メディアの報道の仕方や視点は社会に大きな影響を与えます。日本人と接して嫌なことがあったわけでもないのに、なぜ私は日本に来る前に「日本はよくない国」というイメージを持ってしまったのでしょうか。中国のメディアから受けた影響が大きいのではないかと今になって改めて考えました。中国の政治は共産主義で、共産党の単一党専制になっています。中国のニュースや新聞などは国内外、政治、経済、外交すべての分野において共産党政権を守るための報道をします。このため、中国はよく国際社会の批判を浴びます。日本について、技術が発達し、社会の秩序が正しいなど肯定的な面も報道するが、歴史問題も大きく報道しています。

日本のメディアも中国の偽造問題や食品衛生や反日テロなど否定的な面を大きく報道する傾向があります。たとえば、最近の八カ国会議で環境問題について、先進国と途上国との溝が深いことがわかりました。日本のメディアはエネルギー資源や環境が絡む話の多くは、

中国への批判や責任転嫁論を報道します。しかし状況を正確に認識あるいは理解していない場合もあります。中国の特殊事情である「世界の工場」と「人口抑制策」の二つに対する理解も必要です。すなわち、二酸化炭素排出の約2割は輸出製品製造に伴うものであります。また、中国政府は一人っ子政策が実施されなかった場合、2005年一年だけで約13億トンも排出量がふえていたと主張します。こういう事情をあまり報道せず、批判するだけでは、普通の国民に中国側は身勝手だという印象を与えてしまうでしょう。

両国のメディアはバランスよく、国民が客観的に判断できるような報道をしてほしいです。

また中国のメディアは政治だけではなく、社会問題も明らかにしてほしいです。中国では国民の声はなかなかマスメディアに反映されません。そのため、よく国際社会に「人道的ではない」などの批判をされます。同じ問題に対して、100人がいれば、100通りの考え方があります。中国は人口約13億人で、世界第3位の広さを誇ります。56の少数民族がそれぞれ各自の言語や文化、宗教を持っています。このような事情で、今の中国は確かにまだ一人ひとりの意見が聞ける状況ではないのが事実です。でもメディアが政治、社会の問題点を隠すばかりなら、逆に国民の反抗を起しやすくなると思います。政治や経済など、国民の日常生活と少し離れた問題は、メディアの報道によって知ることができます。したがって、メディアの客観的な報道は重要な意義があります。私は日本のマスコミを見て、中国のマスメディアも透明に報道してほしいと思います。

中国の今年の四川大地震の時に、ただちに正直に被災地の状況を報道し、国内国際の支援をいただくことができ、被害をできる限り縮小することができました。社会の進歩と共に、中国のマスメディアも進化しています。

日本のメディアの報道は国民の不満を公開したり、政府や政治を批判したり、どちらかという問題点を明らかにする報道の仕方です。ただし、日本の場合は、同じことについて過剰な報道をし、視野が少し狭いと思います。最初、テレビをみて、殺人事件や強盗事件などが起きた途端に、すべてのチャンネルのニュース時間はその事件のことばかり放送することに驚きました。実際には中国にもいろいろな事件が起きていますが、メディアはほとんど放送しません。日本のように早く正確に現場から生放送するほうがいいと思います

が、その反面、そんなに大量の放送で国民に不安を与えたり、警察に対する不信感などが高まらないでしょうか。また犯罪の予備軍にはどんな影響を与えるでしょうか。「大きな犯罪を起こせば有名人になるから」という動機で犯罪を起こした犯人もいます。これはメディアの過剰な報道が招いた結果ではないでしょうか。また、現場周辺の住民や当事者の職場や友達、親族への取材は、当事者のご家族の心の傷を深めただけで、事件の解決にどの程度役に立つのでしょうか。報道の正確さは重要だと思いますが、適正で適量の報道も重要だと思います。

中国のメディアと日本のメディアを比べると、もうひとつ大きな違いがあります。中国の場合は国際ニュースが多いですが、日本の場合はあまりありません。メディアは視聴者が関心があるものを放送すればいいと思う方がいると思います。最近新聞やテレビを見ると、日本国内の食品やガソリンなどの値上げが話題になっています。しかし値上げの原因は日本国内の問題にとどまらないはずで、今世界は「地球村」と言われています。アメリカ経済の低迷、中国の大地震、イラク戦争など、「ただよその国のことで、援助できればするが、ほとんど日本人と関係ない」という考えだけではすまないと思います。アメリカの経済の伸びは日本の為替レートに大きな変動を起こしますし、中国の大地震で米産地が大きな被害を受け、世界の食糧市場にダメージを与えていますし、イラクなど原油輸出国がずっと混乱した状態が続くと原油価格の不安定要因にもなります。メディアは身近の問題を報道する際に、国際ニュースを私たちの問題に関連付けて報道してほしいと思います。日本はもともと島国で外来文化を吸収しにくい環境にあります。今観光や留学や仕事などで日本に来る外国の人が年々増えてきます、日本ももっと積極的に外来文化に触れたほうがいいのではないのでしょうか。

マスメディアは大衆へ情報を伝達し、巨大な力を持ち、社会を動かすことができます。日中友好は首脳会談で解決できることではありません。両国のマスメディアは自分の国も相手の国もバランスよく、正しい情報を国民に伝え、国民の心の先入観を除き、社会発展に促進できるメディア報道をするべきではないか。

私は日本に来て7年目を迎えました。最初のような新鮮感や好奇心、驚きなどもなくなりました。日本での生活は今の私には当たり前すぎで、自分が外国にい

るという感覚がなくなりました。今回就職活動のきっかけで、私は自分が見ている日本をもう一回考えて見ました。今また「日本はどうですか？」と聞かれると「自動車技術が発達し、人々が親切できれいな国です」という答えだけでは、もう私が見ている日本をすべて言い表せません。

私は今見ている日本はいろいろな問題を抱えながら、解決方法を探っています。改革を進める中、政府の迷いや国民の失望がありますが、自分の国をディズニーランドのようなきれいな国になるようにとがんばっている国だと思います。

Living The Local Culture- The Importance Of The *Chonaiikai*



Heather Fukase

It is August the 7th. My daughters and I are hanging the *origami* representations of *Orihime* and *Hikoboshi* on the bamboo branch outside our front door. Our neighbor from two doors up calls out 'ima daijou?' and opens our gate. She has brought celebratory *sekihan* rice made with sweet *amanatto* beans as her daughter just had a baby. She reminds me that the meeting to make paper flowers for the floats in the upcoming festival is this Saturday....

Most visitors to Japan have at least a cursory knowledge of Japanese culture before they arrive. For many it is part of their motivation to visit. Be it the romantic image of a young *maiko* tottering through Gion, the fighting spirit of the *samurai* warrior, the mystique of Zen Buddhism, or more recently the doe-eyed girls and troubled boys of *anime*, they come with expectations of what they will encounter. Through western interpretations of Japanese culture such as *Memoirs of a Geisha*, *The Last Samurai* and *The Karate Kid* movies these impressions of an exotic fantasy culture are perpetuated even as they cease to have relevance to most Japanese people's lives. I'm sure I'm not the only naïve tourist disappointed to arrive at Narita and not see *kimono* clad women gliding gracefully through the arrival lounge.

It is no longer even necessary to visit Japan at all in order to experience the culture. Many aspects of Japanese culture have been exported and enjoy popularity on the global stage. The martial arts, *ikebana*, and *taiko* drumming are all practiced throughout the world by people who in many cases have never set foot in Japan. It is not just these traditional arts that are proliferating outside of Japan either. Japanese pop culture is tremendously successful throughout Asia and, albeit to a lesser extent, in other countries too. With the ease of information exchange facilitated by the internet, intricate *origami* instructions, compilations of multilingual *Zen* Buddhist *koan*, and images of the *Nebuta Matsuri* are only a click of a mouse away. Bootleg copies of *Tokyo Love Story* can be bought in Melbourne's Chinatown, and the number of *anime* clubs at Universities worldwide rivals even Tezuka Osamu's prolific output. More than ever before a plethora of cultural practices are readily available to interested parties irrespective of their physical location.

However, this is true of only some aspects of Japanese culture. Just as important in defining what makes Japan unique, just as worthy of the label 'culture' as the examples listed above, are those observances, celebrations and practices partaken by people in their homes and in their communities during the course of

their daily lives. Varying from locale to locale and often organized not for tourists or an outside audience, but for the very people they are organized by, these aspects of culture are such an integral part of an individual's identity as to be the very fabric that makes someone who they are. Elements of life such as regional dialects, local lullabies and variations on children's songs, a certain way of decorating the home for *tanabata*, New Year or *obon*, and local specialty foods. Can you imagine Aomori without *Aomori-ben*? Okinawa without *sanshin* music?

Much as the host of regional *bon* dance variations appear homogenous at first glance, these aspects of culture are not immediately apparent to the tourist overwhelmed by the sights and sounds of Tokyo or Osaka. It is only by becoming part of the community that you can understand its distinctness. The fastest way to become part of a community is through involvement with the *chonaikai*.

Roughly translating as neighborhood association, at the local level the *chonaikai* is the facilitator of many of the cultural events that define a region. My *chonaikai* is instrumental in the planning, orchestrating and supporting of the majority of annual observances for the fifteen households that make up our group. Each season has its events and outings. The year starts with the New Year's Day *sake* party for the head of each household (at 10am!!) and distribution of sweets to the children. *Sankuro*, the burning of last year's *daruma*, New Year decorations and calligraphy on a pyre, signals the end of the New Year holiday period. Spring has the bus trip to pick *sansai* and soak in an *onsen* together, summer, the early morning baseball matches, and autumn the highlight of the year- the inter-*chonaikai* sports day. The *chonaikai* plays a part in the personal milestones of its members too. Monetary gifts are collected and presented to newborn babies, children entering school, people building new houses, turning 20, getting married, undertaking extended stays in hospital and finally the family of a departed member. In fact, when it comes to funerals most of the organization is undertaken by the *chonaikai*. From the door knock to inform everyone of

the passing, the meeting to plan the ceremony, the nighttime vigil, the procession to see off the dead body in the morning, the funeral itself, and finally the meal for the visitors after the funeral. With a minimum of fuss and great value placed on continuing tradition, the members of our fifteen households are rallied in various combinations for a plethora of reasons. Our interactions are not restricted to the celebratory and support spheres either. We gather for far more menial tasks on what I found at first to be a frighteningly frequent basis. Collecting Red Cross donations, manning the rubbish station, cleaning and weeding around the *dosojin*, delivering the municipal newsletter and participating in road safety campaigns are just a few of the tasks that have come our way.

Having moved to the country from the city for the express purpose of spending more time together as a family, I was resentful of what I perceived as an intrusion into my personal time and space. As an Australian I considered friendly relations with my neighbors desirable, but placed far higher priority on spending both quality and quantity of time as a family. It was therefore with little grace and a heavy sense of obligation that I attended my first few *chonaikai* gatherings. Now, three years later, I appreciate the extent an active *chonaikai* enriches the lives of its members. This has been a slow process- more of a gradual understanding than a blinding flash of realization. Burning New Years decorations, doing *rajio taiso* during summer vacation, and barbecuing yakisoba are all things we could do as a family. But would we? So much easier to toss the decorations in the garbage, to sleep past 6:30 am when the calisthenics are broadcast and to cook indoors on the stove. The *chonaikai* serves as a great catalyst. Traditions and annual observances we would let slide due to lack of time or motivation are there for the partaking.

But the value of the *chonaikai* is more than just the events it holds. It's the enabling of interaction that is the core of its importance. For interaction facilitates learning in the most ancient form- passed down from

generation to generation. While we are able to learn about many things from books and the internet it is not the same as experiencing them. It is the difference between *shiru*, to know, and *wakaru* to understand. I can tell you that *daijou* is the local dialect for *daijoubu*. That in this area we make *sekihan* with sweet *amanatto* beans. Or that we celebrate *tanabata* according to the old calendar and therefore a month later than the usual July 7th. But I can't share the feeling of community when thirteen people turn up on your doorstep to pay their respects to the new baby, and express their delight that it's a girl- they've had problems finding the required numbers of elementary school age girls to fill the festival float in recent years. That is something you have to experience to really understand. To *wakaru*.

Living in an older neighborhood of farming families these traditions are followed to a greater extent than they presently are elsewhere. Many of my neighbors have more than one house on their land. *Hiojiichan* and *Hiobaachan* in the old house, *ojiichan* and *obaachan* in the main house with the '*wakafufu*', or increasingly, the *wakafufu* in a new house with the grandchildren. Apple, grape and tomato farmers, they have a strong physical attachment to the area. They live, work and play in the same neighborhood. With farms passing from father to son and going back generations, their ties to the area are as deeply rooted as the gnarled apple trees they tend. Inter-marriage means most of my neighbors are also related in some way. The fourteen other households in our *chonaikai* share a total of only four surnames. In such a close knit community it is not difficult to see why people are willing to invest time and effort in continuing the tradition of the *chonaikai*. This is not true of all communities. Even within the area that, pre-amalgamation, was my village, in many places the burden of time and money that is necessary to ensure the smooth running of a *chonaikai* is not considered worth the effort by the residents. An aging population, greater proportion of nuclear families, more transient lifestyles, and greater ease of mobility all contribute to a gradual minimizing of the role of the *chonaikai*. Rather than fight to preserve this tradition, increasingly people

are choosing to opt out of it. A Japanese friend moved into a new housing development where the seven households agreed to a *chonaikai* in name only. They pay no monthly dues and have no neighborhood events. The formation of the *chonaikai* was simply a formality to appease city hall. All seven households are nuclear families with young children. The housing development was built on reclaimed farmland and none of the families are originally from the town they now live in. Similar housing developments are springing up all over rural and semi-urban Japan as a generation of *wakafufu* decide against taking on the farm and sell up to the insatiable big housing companies. I feel sorry for the people in these developments with no organized interaction with each other- sorry for what they're missing out on, and sorry that they don't appreciate that they are missing out. It's definitely a matter of perception though, the friend I mentioned earlier loves to be regaled with tales of my *chonaikai*'s latest activities. She shudders and blanches the whole way through my enthusiastic recounts and, I'm sure, goes home reassured she made the right choice in escaping all that.

It's easy to dismiss any regret at the decline of community involvement as nostalgia for a past viewed through rose colored glasses. When we can log onto the internet and find communities of people with the same interests and motivations as ourselves, separated by distance and yet merely the click of a mouse away, is it really necessary to sacrifice precious leisure time to observe a traditional celebration we don't fully understand with people whom we have nothing but proximity in common with? It would seem that the answer for many people is no.

Increasingly education, employment opportunities and marriage all serve to uproot people from their hometowns and distribute them across the country, across the globe. Thus uprooted they lose contact with their heritage, with the local culture that made them part of where they are from. While some of this migration is city people looking for a simpler, quieter life in the country- the so called *I-turners*, it can't compete with the

exodus of (particularly young) people from regional areas to the city. Cities serve as great melting pots- high-rise towers full of families from the length and breadth of Japan living cheek by jowl with streamlined and pared down neighborhood relations. I lived a year in a large apartment complex in Saitama. My husband is from Fukushima. My neighbors were from Niigata and Kyushu. There was no *kairanban*, no neighborhood celebrations, and our interaction with each other was completely optional and therefore, in many cases, nonexistent. Long work hours and long commutes- often for both partners, served as a physical limitation on neighborhood involvement. The proximity and abundance of family leisure attractions meant you could find all the entertainment you could wish for without any more effort than handing over some yen. Living elevated from the ground as we were in our complex, we were literally and figuratively out of touch with the local community.

Thus removed from both our hometowns and the local community, my friends and I, by virtue of being the wives of *sarariman*, shared a common culture. Saying goodbye to our husbands by 6:00am and virtually single parenting our children while our partners arrived home after midnight, we lived a life of time sales, park outings, play circles and lunch dates. Ninety percent of the time we were interchangeable with each other. But, underneath the patina of bed town housewife lay strong ties to our different heritages. A request for information on how to make the traditional New Year soup *ozoni* turned into an extended discussion as the merits of soy sauce and chicken Tohoku style were pitted against *miso* and *satoimo* Kansai style. Similar discussions ensued concerning the words to folk songs and the particulars of the traditional celebration of a child's first birthday. It was occurrences such as these that provoked my interest in the role of local culture in the forming of identity. Watching for these subtle cultural influences, I began to see them in many of the people around me. Removed from their environment the importance of these aspects of every day life previously taken for granted had become apparent. The pride and longing

with which they talked of their '*furusato*'. How quickly they reverted back to the dialect of their hometowns when speaking to a fellow local no matter how long since they'd left. The cravings for a particular dish, cooked in a particular way, which symbolizes home.

Australia has a white settled history of just over 200 years. While commentators like to debate the differences between Melbournians and Sydneysiders, and the extreme differences in geography do play a part in shaping the inhabitants of each state, there hasn't been enough time for emotional and physical attachments between people and their locale to form in the same way as Japan. It was therefore difficult for me to understand the passion with which my host family in Fukushima's Aizu-Wakamatsu city regaled the region's pride in being the last people to fall to the Emperor in the *Boshin* Civil War. They spoke of the injustices and hardships of 150 years ago as though they happened yesterday. While I don't think anyone who is not from the Aizu region can ever fully understand those feelings, I find myself identifying with my region (in my case the pre-amalgamation village) rather than my new city in the same way so many from the Aizu region introduce themselves as such rather than as being from Fukushima.

I am not alone in this reluctance to embrace post-amalgamation reality, and sadly distinct local cultures are not just at risk from the changing lives of the local people but from the changing political map as well. There have been three major amalgamation movements since the *Meiji* period, each working to erase hamlet size villages from the map and rewrite it as a more financially viable and easily governable one. The village my family lives in disappeared in the last of these, the Great *Heisei* Amalgamation that ended in 2006. Once an apple and tomato growing village at the foot of the Southern Alps we are now part of a sprawling megacity- an amorphous conglomeration of distinct communities yet to gel as one. For, while it only takes a day for your address to change and you to geographically become part of a city, it takes a lot longer for your identity to change, if ever. As if

sensing the emotional needs of its new citizens, the city has been gentle and gradual in effecting change- but it is inevitably seeping in. Funding for *chonaikai* has been cut and the four annual sports meets have been trimmed to one. Of course, there is new to replace the old- we were invited to enter a local team in the city's annual *bon* parade. Volunteers even came out to the community centre to teach us the particulars of the city's version of the traditional *bon* dance. As with all change, there were those who eagerly embraced the opportunity and those who preferred to bemoan the intrusion of alien culture and the loss of the old ways.

I, too, fear that the local traditions and celebrations, the local culture that is so much of why I love my adopted *furusato*, will face extinction or relegation to the city museum as it is swallowed up by the city or dies from the roots up as community involvement decreases. But

it is futile to pine for the way things were. It is up to us, as individuals, as families, as members of our *chonaikai*- and by extension as citizens of our villages, towns and cities, to seek out the local culture, to ask about it, understand it, participate in and support it, and then to impart it to our children and the children in our neighborhoods.

And that's why, come next August you'll find me out on the front step with my daughters again. Stringing up the *tanabata* dolls. I hope my neighbor will bring her granddaughter over to toddle on the lawn with my children while she explains the schedule of festival preparations. Then again, maybe our roles will be reversed as next year it's my family's turn to head the *chonaikai*. A native of Fukushima and his Australian wife overseeing the continuation of grassroots culture in a handkerchief sized piece of central Nagano. Wish us luck!

Japanese Culture, My Cup of Tea



David McMurray

By the time I finish a second pot of tea every morning, I'll have read 100 or more haiku poems. They arrive at my home in Kagoshima by postcard, fax and e-mail. Haikuists write to me from most every prefecture in Japan and from many countries around the world. Most of the overseas writers have lived or at least visited Japan. That is how they came into contact with this fascinating shortest poem in the world. I enjoy reading their haiku, short poems about the everyday life of people lead in modern times, and would like to share some of them with you in this essay. Haiku poetry is an intriguing form of communication provides an insight to how people live and what they think about. Each week, I select nine for a column called *Asahi Haikuist Network* that appears on Friday in the *International Herald*

Tribune/The Asahi Shimbun edited in Tokyo. Asahi is a Japanese phrase meaning "morning sun."

I chose an oolong blend of tea this morning. The tea master who sold the mixture of black and green leaves to me in Taipei said they could be infused up to nine times. "The fourth and fifth tasting of the partially fermented leaves would be the best," he said. I apply that philosophy to the way I edit poetry submissions. I pare words to a minimum and encourage a three-line, 3-5-3 syllable form rather than the popular 5-7-5 form in English, often reviled by serious poets as spam haiku. A few are composed on one or two lines in fewer than 17 syllables. More than just an image, a reference to nature and a thought, the poem needs a subtle surprise,

"ahness" or intriguing juxtaposition that brings the three lines together. It is not just a pretty picture in words.

K. Ramesh sent me a poem from Chennai, India. It was a lovely poem, but he was concerned about the form (which is 4-7-4, but I occasionally accept such variations) and the meaning of a few of the words he had employed. We bantered back and forth about the poem by e-mail. He sent a few revisions before we settled on this one for the newspaper:

*Reading in bed . . .
memory of the flavour
evening tea*

I have received haiku from writers in over 50 countries. I keep every letter, every foreign stamp. Occasionally I receive haiku from a priest living in Malta. Missing his train, Francis Attard said he had time to enjoy tea with a stranger.

*Missing the fast train
tea with a stranger scented
in paper cups*

Wen Wei is from New York, but he occasionally visits family in Tokyo. He is sometimes delayed by the weather. He sent me a haiku from Narita that contrasts all of autumn and its furious hurricanes and typhoons with the serenity of a simple cup of tea.

*Blue autumn
hurricane gone, cup
of warm tea*

I regularly receive haiku from a science teacher in North Carolina who studied for a year on sabbatical in Hiroshima – where quietly sipping his tea Charlie Smith realized that fall had begun.

*Gentle breeze
first autumn colors
float in tea*

But I think the American prefers coffee most. In the next haiku Smith put emphasis on a red oval—perhaps a coffee maker logo like *Seattles Best*.

*Red oval
vending machine change
hot coffee*

Murasaki Sagano in Kyoto and Angelika Wienert in Germany are also coffee connoisseurs.

*While chatting
an autumn wind sweeps --
aroma of coffee*

*Drizzle
across the street
a coffee bar*

Michael Corr has been living in Nagoya for two decades. He has been sending me haiku every week for the last 14 years. A botanist, he often writes about plants, and he enjoys a *cuppa*. He believes composing haiku is best the first time it is set down in print. Like the impulsive beat poets of California, he writes dozens of haiku at a time, rarely changing them. He has the uncanny ability to spout haiku poetry in both 5-7-5 and 3-5-3 syllables on a whim.

*In Kanayama
tea house tiger lilies are
lavender ones ah*

*Fresh Nishio
tea delivered boxed
just from beach*

Kennosuke Tachibana sent me a haiku daily during my first eight years as a columnist. I was with him through illness, depression and even dental visits, all vicariously through haiku. We've never met. By reading his many letters and haiku I learned that he was born in Matsuyama, studied at Aiko Gakuen High School, and

moved to Tokyo to become a journal editor. When his father died, he composed the following to express the sound of summer birds in the hills near his native Matsuyama.

*The white smoke
of his cremation
mountains laugh*

I have met very few of the people who write to me almost every day. We share poetry at first. I do my best to question, suggest, and after I get to know the writer better, sometimes even edit their poems. Editing poetry, lines written with direct links to someone's heart, is not at all like editing this essay I am sharing with you now. Although the notes in my column are closely proofed, the editors at the head office of the giant newspaper company never touch the poems.

Haiku, the smallest poem in the world, allures people in different ways. Some are tempted because it looks so easy to write. The more they write, the more they become attracted to its complexity. Japanese who grow up with haiku in school find the English version particularly tempting. Anna Akamatsu has been a constant contributor of fine poetry to my column for 14 years. I still remember the day she wrote to happily announce the creation of her "first haiku composed directly-originally-in English."

*Gardenia
in memory of
Summertime*

Her breakthrough was achieved while watching "Summertime," a romantic movie filmed in Venice in 1955 starring Katherine Hepburn and Rossano Brazzi. Akamatsu said that she was definitely "thinking in English then." Prior to her debut in English, she had reflected on the process of how she translated her own Japanese compositions. Reading from my book, "Haiku Composed in English as a Japanese Language," (Pukeko, 2003), she sympathizes with students who "feel

it is much safer to translate their native Japanese" and agrees with a premise raised in the book that the "translation of haiku is impossible." So Akamatsu tried to conjure the original images of her Japanese haiku and to re-experience them until they became clear again in her mind before expressing them with English words. She admits she can't use this process successfully on other haikuists' poems, but she is able to bilingually share her own heartfelt messages. In just a few words - a few nouns, maybe a verb - and little grammar, haiku composed in English can express much to English speakers. Here's one more haiku from that budding author of haiku composed in "English as a Japanese language." It's about her favorite sweetly perfumed white flower.

*Gardenia
in a roof-garden
remains so*

Some haikuists prefer to study past masters of haiku such as Kobayashi Yatarô (1763-1828) who chose *Issa*, meaning cup of tea, as his pen name. He wrote: *yamadera ya cha no ko no an mo kiku no hana*. Perhaps he had a sweet tooth in addition to enjoying a good cup of tea.

Mountain temple
the sweets served with tea
shaped like mums

I enjoy the sweet taste of maple tea. It is readily available in a shop near my home in Kagoshima. I also enjoy sipping tea in a shop called *Haiku-jaya* or *Haiku* Tea House. All its walls, beams and doors are hung with *haiku*-sheets composed by customers. When I return from vacation in Canada, from my cottage on Maple Lake in Ontario, I always bring back maple syrup and a haiku penned in Canada for the neighbors. The taste is a bit sweet for them, so I really shouldn't add maple sugar and cream to the scented tealeaves when I drink it here in Japan. Tea is best when it is clear. The images used in haiku must be clear and the reference to time or nature

explicit. Haikuists eliminate overly bold metaphors or similes and explanatory remarks. Something must be left unsaid.

The Canadian poet Eric Amann once defined haiku as "the wordless poem." Meaning is more important than the words, he claimed. I suppose the most moving poetry lies not in the syllables, not the words, nor the lines, nor the meaning. The timing of a poem is what matters. When the timing is right, readers will always be receptive to a poem no matter when it is penned.

Having selected haiku for 14 years as an expatriate Canada in Japan, melancholy sets in the deepest when a fellow Canadian returns home. Canadian Barbara Wybou wrote to tell me that she was preparing to return home to Toronto after having resided in Tokyo for 18 years. That homecoming has motivated her to start recording precious memories. She says, "There is nothing like composing haiku to keep alive moments in time." She shared two haiku with me. The first was written while she was coming home from the Kawagoe antique market.

*First cold night
smells of grilled fish
floating on wind*

The *datura* that she mentions in the next haiku is a plant that blossoms at night. It is also known as jimson weed and looks like an oversized morning glory. Its large, white flowers close in the morning, wrapping themselves into star-shaped buds.

*Revealing its depths
a star-shaped datura bud
spreads into moonlight*

Wybou says that once she started writing haiku, she realized the extent to which she didn't know the names of plants and birds in Japan. She revealed that "Last spring I stopped someone on the street to ask what bird it was making a strange sound, only to find out that I was

listening to a frog!"

The next haiku illustrates an attempt by Antol Knoll to learn the name of the frog while she was touring Japan. Knoll, who works in the incunabula (pre-1501 printings) department of Old and Rare Books at the Austrian National Library in Vienna, asked me to decide whether the onomatopoeic sound of the frog in Japanese (*kerō kerō*) is better than the English: "but where is the frog?"

*Honda, Toyota,
Nissan, Subaru, Datsun
kerō kerō ka?*

The first issue of my Asahi Haikuist Network column appeared April 5, 1995 in the Asahi Evening News. Over 10,000 haiku have been printed since: Many of the contributors becoming well-known haikuists. The greatest change in haiku submitted to the Asahi Haikuist Network during the past 14 years has been the shift from 5-7-5 picturesque or idiomatic-type poems to shorter 11-syllable poems that use poetic techniques such as metaphor to fuse images of humanity and nature. This trend toward shorter English verse is likely to continue in Japan, where 10- and 11-syllable haiku in English are awarded top prizes.

Yukiko Yamada, a talented haikuist who sent me many haiku from Tokyo wrote to me one day about going to live in Matsue in 2005.

*Moving day
one last look
cherry blossoms*

Her haiku won first prize in the Haiku International Association contest that year. She prefers life in her new home in the country, but I think she still reminisces about the big city. Traveling up and down hilly back roads in Tottori Prefecture, I understand from her haiku that she passed through a tranquil town just after dusk. Hungry from the day's drive, she noticed a *soba* shopkeeper closing his door for the day. Urban dwellers take 24-hour convenience stores and restaurants for

granted, but shops and restaurants in small towns tend to close early.

*The lonesome village --
willingly served buckwheat noodles
after closing time*

Some writers want to capitalize every line, which can make the little poem topple over sideways on the page, and others are upset if I don't use all lower case when I print the column. Haikuist og asknes in Norway wanted to leave our network of haikuists around the world because I once capitalized his name. His work is wonderfully pithy, so I have obliged ever after:

*november
moon, feeling closer
to my bones*

In an age when trendy people sport a coffee cup while walking down the street listening to music through earphones or sending text messages through a cell phone no one wants or seems to have the time to read

anything that is very long, haiku can seem the perfect form. Being the perfect selector is another matter. As constant counsel to the way I edit haiku and read the letters from contributors, I always keep in mind a haiku by the 18th-century master, Yosa Buson, translated from his 5-7-5 into a 4-7-4 format:

*Passing spring
rejected poet resents
the selector*

There is a steady warm flow of rain outside my window. This afternoon I'll begin selecting haiku for this week's column, and try to keep cool with a tall glass of ice tea. In a frame by the window I notice a translation I made a few years ago of a haiku composed by the last recognized master of haiku, Masaoka Shiki. He had worked as a newspaper editor in Tokyo.

*Alone
in the editorial room
summer rain*

All I Really Need to Know About Japanese Culture I Learned in Summer Camp



Patrick John Reyes Ramos

Robert Fulghum's "All I Really Need to Know I Learned in Kindergarten" is my all-time favorite essay. It talks about lessons normally taught in kindergarten classrooms and describes how the world can be a better place to live in if we all just follow easy and simple rules like children such as sharing everything, playing fair, not hitting others, cleaning up one's own mess, washing hands before eating, not taking things that belong to others, holding hands and sticking together and living "a balanced life" of work, play and learning. It encompasses

several aspects of life from the Golden Rule, love, kindness and sensible living to basic sanitation, ecology, politics and equality. Straightforward and candid as it is, the article teaches us all the things that really matter in this world. And so in the same style and fashion as Fulghum write about life's essential points, I now share the most significant things I learned about the Japanese culture from my brief but very fun and exciting summer camp experience.

A couple of days ago, I had the most wonderful opportunity of joining an English summer camp with the first grade students of the Kirigaoka Junior High School. The camp was mainly organized to help Japanese junior high school students get used to the English language and improve their listening and speaking abilities through interaction with foreign students during several indoor and outdoor activities at the peaceful and scenic environment of Nasu in Tochigi prefecture. As one of the foreign staffs, my basic task was to lead a group of 12-year old kids in a number of fun-filled and educational activities during the 3-day affair. The event, which was packed with lots of songs, dances, games, cultural performances, picnics as well as hiking, camping and sightseeing activities, was truly a wonderful occasion not only for the young students but also for me and my fellow foreign facilitators. Little did I know that this activity would be a great learning experience for me and that it could give me so much insight and ideas about Japan and its rich and exceptional culture.

First, I learned that discipline is one of the pillars of the Japanese way of life. In the beginning of the camp, I thought that it would be challenging and difficult to instruct and command the young students knowing their juvenile, zesty and energetic character. But throughout the event, I witnessed how the kids ardently obeyed and followed the rules and guidelines of all the summer camp activities. Even the simple practice of using seatbelts during bus rides, which demonstrated the children's discipline and their respect for the law, impressed me a lot. What's more, every single camp activity began as scheduled showing the high regard Japanese have for punctuality and the importance they put on time. Orderliness and organization were truly evident in everything that the Japanese kids, teachers and camp instructors do. These plain observations clearly illustrated the huge position discipline occupies in the Japanese culture. It became clear to me that the great political, social and economic success of the entire country ensues mainly from the profound sense of discipline inherent in the Japanese people even at a very early age. Obviously, this acquiescent and disciplined

populace helped Japan achieve its current status as one of the world's most highly-developed and integrated society.

Second, I recognized that cooperation, team spirit and solidarity are other essential facets of the Japanese culture. The notion that any group in the camp could not take a meal with a single member missing helped prove this point. Consequently, my assigned students took efforts to gather together and call me, as their team captain, once breakfast, lunch or dinner time comes so that we can all eat simultaneously. This idea truly struck me as something extraordinary and praiseworthy since not only did it teach the values of team spirit and harmony but it also made the students appreciate the importance and worth of each individual team member. Another feature of the Japanese culture I experienced during the summer camp was the use of public or common hot bathing facilities, more popularly known as *onsen*. This custom might seem strange and shocking to most foreigners like me but this shared and communal bathing practice only served to reinforce the Japanese virtues of unity, cohesion and team spirit. Of course, there were still other instances wherein I observed the Japanese culture of solidarity like the many occasions in which my group of students exemplified team work and cooperation during most of the summer camp activities and games. In these events, my kids did not mind whether we win or lose as long as we were all enjoying and having fun together. This made me think that the Japanese culture places more significance on the spirit of camaraderie over actual victory. Again, these perceptions helped me understand the way the Japanese people behave toward their work, their country and their attitude toward life in general. Simply put, the Japanese people believed and adhered to the famous *Three Musketeers'* motto of "one for all, all for one" in their everyday living.

Third, I realized that the Japanese culture seeks to achieve a sense of balance and a holistic nature. One of the good points I noticed about the summer camp program was that it gave adequate time for the

participants to play, learn and relax. During the “chat time” activity, we had fun and played several card, dice and board games with the students. In the “It’s a Small World” activity, we helped them create posters that highlight the different cultures of the world and it is during this time that we taught them simple and basic English sentences to enhance their listening and speaking skills. And when we visited the *Rindo-ko Family Ranch* during the last day of the camp, we were able to relax and enjoy the theme park’s scenery and amusement rides. It was interesting to note that the Japanese junior high school students zealously participated in all these activities. While they knew when it’s time to learn and to get serious, they certainly knew how to have fun and enjoy their leisure time. These observations showed the consideration that the Japanese culture gives to “a balanced way of living”. Accordingly, this special kind of concern for “a balanced life”, instilled at such a young age, would teach the kids the importance of having a holistic and well-rounded personality when they grow up to be the future citizens of the country.

Fourth, I discovered the great appreciation the Japanese culture has for nature and everything that comes from it. This could be understood from the fact that Japan is gifted with so many lovely and picturesque places. Our hiking activity in *Kenkatura* highlighted this thought even more as everywhere I turned, I saw abundant greeneries, flourishing trees, clear and sparkling brooks, natural freshwater streams and magnificent cascade waterfalls. But the important thing I learned was not only did the Japanese recognize the beauty and value of nature, they also know how to take good care of their environment. They respected their surrounding and worked to preserve and enhance its beauty and splendor. This truly overwhelmed me and made me appreciate the Japanese culture even more as unfortunately, I come from a society where little importance is put on conserving and keeping the natural environment. I firmly believed that if the other cultures around the globe can only learn the same respect the Japanese have for the sanctity of nature, our world will be a much better and

sustainable place for us and the future generations.

Fifth, I found out that what makes the Japanese culture vibrant, thriving and brilliant was the fact that Japanese people are always eager to learn and search for new ideas and knowledge. My students were not afraid to ask me questions all throughout the summer camp despite their struggle with the English language. They used hand signals, drew symbols or did anything they can think of just to communicate their ideas. This inquisitive nature truly amazed me and gave me the impression that perhaps, it is this very nature that made the Japanese famous for countless fresh and innovative ideas and technologies. Presumably, the Japanese people’s curiosity to be familiar with the world around them and their strong motivation to discover modern things and come up with breakthroughs and inventions helped generate their country’s rich and vivid culture.

Lastly, I learned that the Japanese culture, although unique in its own, is also very much open to embrace and acknowledge other cultures and backgrounds. This was evident during the international cultural night held on the second day of the camp. In this activity, all the groups staged various performances representing the cultural background of their respective team captains. There were Korean chants, Indonesian tribal dances, Indian presentations, Thai songs, Chinese hymns, French acts and Malaysian performances. For my part, I taught my group a very famous, cool and hip Filipino song and dance rendition much to the delight of the whole audience. Albeit the difficulty imposed by the language barrier between me and my students, I was able to teach my kids simple Filipino lyrics and their accompanying dance steps mostly because of their enthusiasm and receptive attitude toward my own native culture. This openness and welcoming behavior concerning other people’s backgrounds truly astonished me and made me believe that the traditionally isolated and strictly homogenous Japanese culture has finally evolved into one with a more global and tolerant character. Of course, this recognition of a more open and receptive Japanese culture could be corroborated by the

country's current active involvement and participation in various global affairs and dealings whether in the realm of economics, politics or social order. Evidently, this idea was supported by the cultural exchanges and celebrations I witnessed during the summer camp's international night.

The fact that I learned all the above things from the incredibly short time I spent with lively and cheerful Japanese kids makes my recent English summer camp experience all the more interesting. I do understand now why Robert Fulghum said in his critically-acclaimed essay that life will be more meaningful if we just hold on to the basic lessons we can learn from children. What Fulghum failed to mention, however, is that observing young kids and their behavior can likewise be an opportunity and means to better comprehend and appreciate the culture of the society where these children belong to. Certainly, I get to know the Japanese culture and the Japanese way of thinking more deeply from the interactions and exchanges I had with the vivacious and modest junior high school students in the summer camp. The lessons I learned from these kids will surely help shape my future view and perception of Japan, its culture and its amazing people. Through this experience, I now have a wider appreciation and enjoyment of the people, things and places around the country I consider my second home. Without a doubt, I will always cherish every moment of this encounter – an

experience that will forever remain in my heart and in my memory.

Culture is often defined as “the way of life for an entire society” that includes art, codes of manners, dress, food, language, religion, rituals, norms of behavior and systems of belief. As such, words like *samurai*, *sumo*, *sake*, *sushi*, *tempura*, *kimono*, *ikebana*, *kabuki* and *manga* easily come into mind when one speaks of the Japanese culture. While I agree that these things are popular representations of Japan, I do believe that more than these well-celebrated icons and symbols, the Japanese people and their values and ideals are the real wealth of the country's culture as I just learned and discovered from my very recent summer camp experience. Indeed, the Japanese people's exemplary discipline, their incessant search for knowledge and new ideas, their spirit of camaraderie and sense of commonality, their appreciation and passion for everything that the world offers and more importantly, their unwavering respect for the law, for nature and for other people, regardless of race and religion, are the points that make the Japanese culture genuinely unique, fascinating and remarkable. All these things lead me now to sincerely look upon the country and its culture with utmost reverence and admiration. These are also the same things that every single *nihonjin* in this nation should truly be proud of and which the country can rightfully offer as its legacy and heritage to the whole world.

当協会の運営を支えてくださっている団体・個人

◆協会役員

会長	西島 安則		
理事長	千 玄室		
評議員	青谷 正妥	稲田 和子	稲盛 和夫
	岩淵龍太郎	大倉 治彦	大南 正瑛
	柏瀬 武	加藤 剛	小松 左京
	齋藤 修	クラウド・シュベネマン	
	クレイグ・スミス		立石 義雄
	田村 武	畑 正高	林 正
	日高 敏隆	広中和歌子	
	ジョン・マカティア		水谷 幸正
	南 恵美子	村田 純一	森 純一
	森田 嘉一	山本 壮太	
理事	荒木不二洋	海田 能宏	柏原 康夫
	川島 良治	北川善太郎	糸田 猛
	児玉 実英	小林 哲也	金剛 永謹
	白石 厚子	千 玄室	玉村 文郎
	西島 安則	畑 肇	富士谷あつ子
	森 金次郎	横山 俊夫	
監事	猪野 愈	長谷川 彰	
顧問	池坊 専永	梅原 猛	岡本 道雄
	門川 大作	沢田 敏男	茂山千五郎
	広中 平祐	山田 啓二	
幹事	二股 茂		

◆法人維持会員（一口50,000円／年）

(財)池坊華道会 オムロン株式会社
京都外国語大学 (株)京都銀行 (株)京都新聞社
京都信用金庫 京セラ株式会社 月桂冠株式会社
(財)今日庵 サントリー株式会社 (株)松栄堂
(株)淡交社 (財)不審菴 佛教大学
ガリオア・フルブライト京滋同窓会
村田機械株式会社 (株)ワコールホールディング

◆一般会員（一口5,000円／年）

鶴屋 吉信 国立京都国際会館 浅野 敏彦
泉 文明 糸井 通浩 大倉美和子
乙政 潤 加藤 久雄 玉村 禎郎
名和 又介 井上 章子 大北 一雄
嶋本 幸治 竹澤 雅子 田附 房子
辻 加代子 松本 健二 中村 皓一
中島 千恵 西尾 節子 西澤 典子
山本 祥子 講座受講生 日本語教師
スタッフ

(敬称略・順不同)

本誌には再生紙を使用しています。

Our NEWSLETTER is printed on recycled paper.

◆協力者

浅野 愛子 三宅 乃里子 藤田 榮一
石田 紀郎 安間 てう子 川口 珠生
清水 宏美 (敬称略・順不同)

◆特別プログラム後援

京都府 96万円 (国際交流講座・国際文化講座・
エッセーコンテスト)
京都市 28.7万円 (国際交流講座)
千玄室 100万円 (国際交流講座・国際文化講座・
交流プログラム・エッセーコンテスト)
京都ライオンズクラブ 20万円 (エッセーコンテスト)
(株)にほんごの凡人社 12万円 (国際文化講座)
(株)スリーエーネットワーク (国際文化講座・
エッセーコンテスト)

編集後記

ことのほか美しかった今年のさくら。京都は早や若葉の季節を迎えようとしています。この一年、定番の「エッセーコンテスト」や「国際茶会」などに加え、「ボランティアによる日本語レッスン」が軌道に乗りました。教室も兼ねる事務局は学習者とそのパートナーのボランティアが交流し、教え合い学び合う活気に満ちています。遠い国から京都を訪れ共に生きる人々との交流を目指して30余年、日本語教育を柱にと心がけてから20年が過ぎようとしている日々、より多くの方にお読み頂けることを願ってニューズレター35号をお届けいたします。

Dear Readers,

We are a non-profit organization working for a better communication between the Kyoto citizens and visitors from abroad. For further information, please call our office:

TEL. 075-751-8958 FAX. 075-751-9006

E-mail office@kicainc.jp

URL http://kicainc.jp/

Kyoto International Cultural Association, Inc.
Rm116 Kyodai Kaikan
15-9 Yoshida Kawahara-cho
Sakyo, Kyoto, 606-8305 Japan